第44回文化講座

首里城京の内倉庫跡出土の金属製品について

～琉球王国の兜鉢立物（かぶとばちたてもの）を中心に～

【日時】2月5日（土）14：00～16：00
【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

目　次

１.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２.首里城「京の内」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・３

３.倉庫跡の出土品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

４.「京の内」倉庫跡から出土した金属製品・・・・・・・・４

５.兜鉢立物飾り金具と兜鉢・・・・・・・・・・・・・・・１６

６.おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

首里城京の内倉庫跡出土の金属製品について
―琉球王国の兜鉢立物を中心に―

金城亀信（県立埋蔵文化財センター）

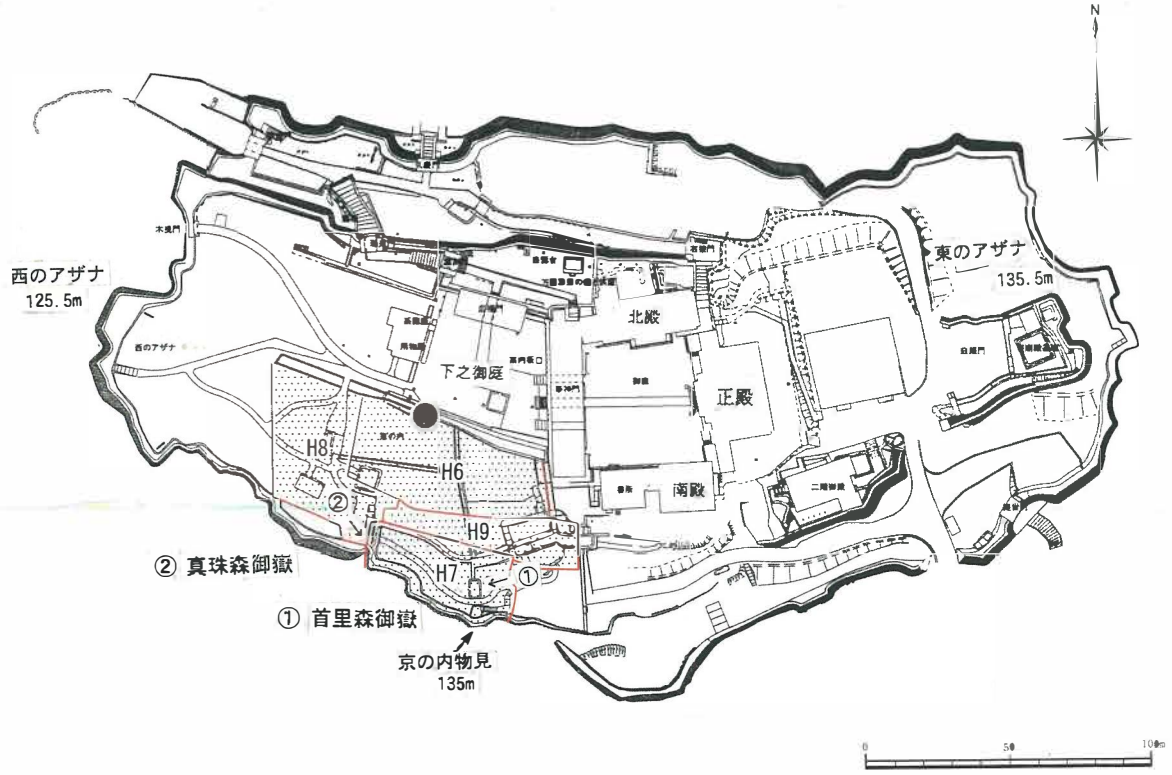
１．はじめに

首里城京の内地区の発掘調査は、平成６（1994）年度～平成９（1997）年度迄の４カ年間に亘って実施（調査面積は約 5,000 ㎡）されました。その内、平成６年度の発掘調査（調査面積約 2,000 ㎡）で、調査区中央寄りの北壁近くから倉庫跡が発見されました（第１・２図）。

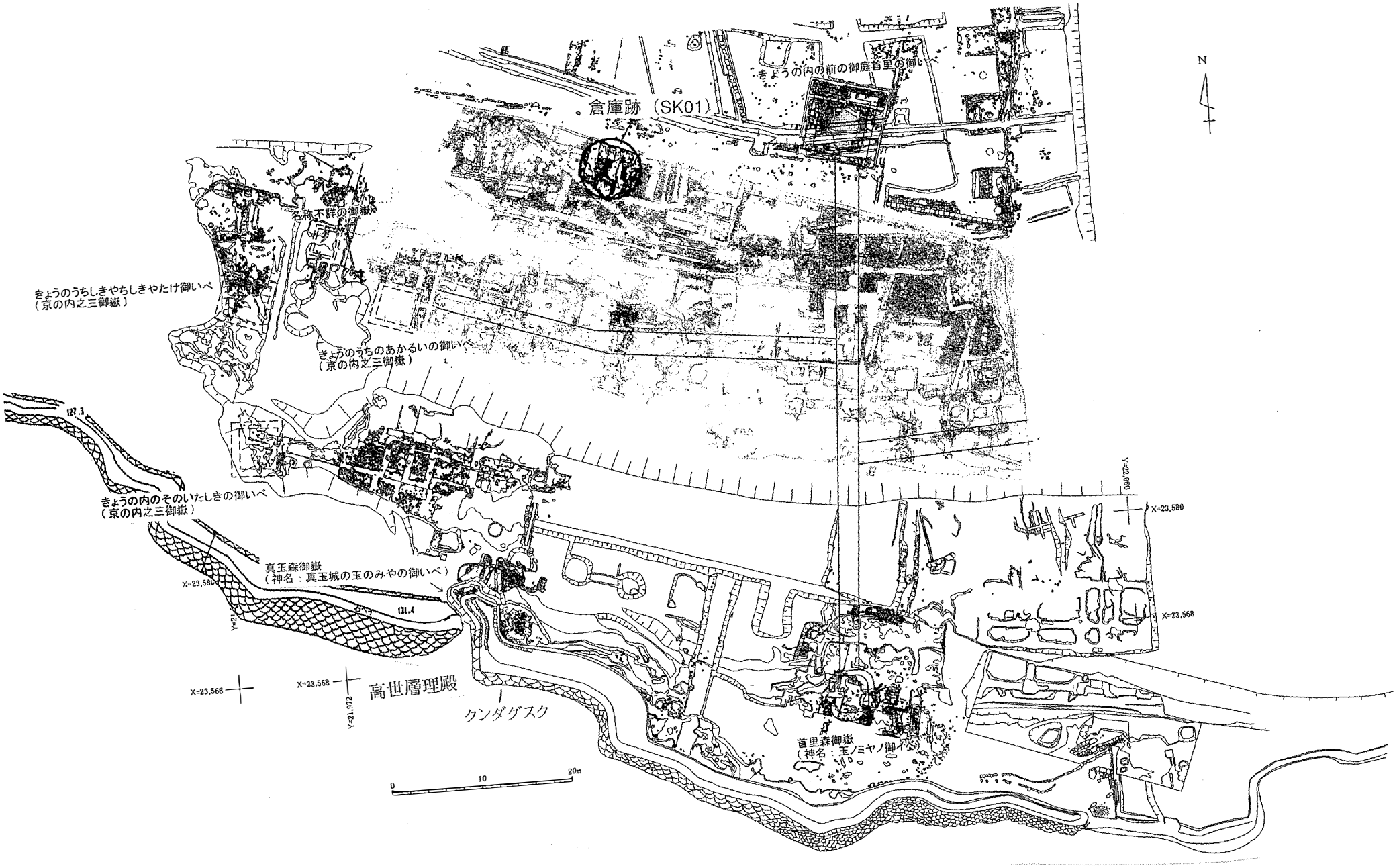
発掘された倉庫跡は、倉庫の南西隅の一部と倉庫への出入口に当たる部分で階段が三段確認されました。また、倉庫の内部からは交易によってもたらされた輸入陶磁器類を主体とした多量の陶磁器類で構成された遺物包含層（層厚 60cm）が厚く堆積し、土砂を一切含んでいませんでした。発掘された倉庫跡の面積は 7.5 ㎡（2.5m × 3m）がありました。

多量の陶磁器以外に金属製品やガラス製品（小玉や勾玉）なども含まれていました。
これらの遺物は倉庫火災によって火熱を受けた陶磁器や金属製品などが一括で廃棄されたことが判りました。また、この火災によって倉庫西側の壁材として使用された切石の石積みも火熱を受けて赤く変色して脆くなっていました。

倉庫火災の年代については、1453 年の王位継承問題で起きた志魯・布里の乱で首里城正殿と共に焼失した倉庫跡か、或いは 1459 年に中国明王朝（1368 年～ 1644 年）の歴代皇帝の実録を記した『明實録』に掲載された英宗實録、巻 301 に「天順三年三月癸未 朔（ついたち） ［甲申］禮部奏・琉球國中山王尚泰久奏稱本国王府失火。延焼倉庫銅銭貨物・・・」と記載された倉庫跡のいずれかが推定されましたが、正殿近くあった倉庫と京の内の倉庫の位置関係や調査地区周辺の状況などから、後者の 1459 年に起きた火災により焼失した倉庫であることが判りました。



第１図　首里城跡京の内地区年度別発掘調査箇所（●が1459年失火焼失の倉庫跡）



第２図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間復元案

(御嶽の名称は、社団法人 日本公園緑地協会作成の平成 11 年度 首里城京の内区画調査検討委員会 第１回 説明資料 平成 11 年 12 月 10 日 を参考に修正・加筆)

なお、倉庫跡から出土した陶磁器類は、平成12年6月27日付けで国の重要文化財（考古資料の部)「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス製品　一括」の名称で戦前・戦後をとおして沖縄県ではじめて指定されました。

2．首里城「京の内」とは

1)「京の内」は、首里城内郭の南西側にある最も神聖なる祭祀や儀式をおこなう空間です。京の内の語義として「けお（きょう：京)」は、「セジ（霊力)」の同義語として考えられ、“神または神の霊力”の意味を持っています。

また、民俗学では、神が降臨する大岩の頂上やシマ前（集落海岸近く）の岩島・小島を「京：きょう」と称しています。その他、南城市知念の斎場御嶽内の三庫理に入る右手側の大岩の頂上を“キヨウノハナ（ギョウノハナ)”と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キヨウノハナ”を拝み、香炉の側にあったクバ（ビロウ：ヤシ科の常緑高木）の神木を足掛かりにしてアマミキョが天降りされたなどの事例からも「京の内」の「きょう」は、神が降臨、若しくは来訪する場所の意味合いがあります。

次に京の内の「うち（内)」は“聖域”・“区域”などの意味があります。従って、京の内は「神が降臨する聖域」として理解されます。

2)「京の内」の御嶽

京の内に所在した御嶽は、基本的に五つの御嶽で構成されていたようです。京の内の最も高い位置（標高 135m）に「首里森御嶽（神名：玉ノミヤ御イベ)」、岩山の洞穴部分に「真珠森御嶽（神名：真玉城の玉のみやの御いべ)」があります。

この両御嶽が首里城の別称（聖名）となった「首里森ぐすく」或いは「真珠森ぐすく」と称されているのもこの御嶽の名前に由来します。その他、この二つの御嶽の創設に関する由来では、沖縄の開闢神アマミキョが造った御嶽とされています。

また、“京の内之三御嶽（神名：きょうのうちしきやちしきやたけ御いべ、きょうのうちのあかるいの御いべ、きょうの内のそのいたしきの御いべ、の三神)”と称される三つの御嶽（第2図）がありました。

京の内にあった五つの御嶽は、発掘調査で確認された石積み遺構などを基本にして、平成 13（2001）年度から御嶽や石積みの復元工事が始まり、平成15（2003）年度に復元を終えています。

3)「京の内」での祭祀・儀式

首里森御嶽の西側城壁は、城壁がアーチ門にすりつけられた部分があります。この部分が新国王に託宣を下す“君手摩（天神または陽神)”の神を迎える場所であったと言われています。

首里森御嶽では琉球王国最高神神であった“聞得大君”を頂点とする高級神女“三十三君”が、降臨神の“君手摩”の神を迎えて、“聞得大君”を中心とした高級神女と共に歴代の琉球国王へ“世おそうせぢ（世を治める霊力)”が高まるように“オボツ・カグラ（神の居所。)”と“ニライ・カナイ（海の彼方、若しくは海の底、地の底にあってそこから神々が来訪し、さまざまな豊穣と幸をもたらす)”の神に祈願し、国王へ託宣を下したようです。この京の内では、“君手摩”の神を迎えての歴代琉球国王の即位決定を初め、国王への託宣、琉球王国の重要な祭祀や儀式が行われました。

参考までに第一尚氏王統（1406 年～ 1469 年）の最高神女は“佐司笠”であったが、第二尚氏王統から地位を“聞得大君”に譲るが佐司笠は依然として高い神格があったようです。

３．倉庫跡の出土品

倉庫跡から発掘された遺物には、中国産陶磁器（青磁・青花・白磁・褐釉陶器など）を中心にタイ産（褐釉陶器壺・土器）、ベトナム産陶器（青花の瓶と水注）、本土産の備前焼（擂鉢・壺）、沖縄産瓦質土器（蓋）、などが含まれていました。

陶磁器以外に倉庫の出入口に取り付けられた錠（第３図４）、青銅製の鼎形香炉や花瓶（第４図 16 ～ 20）をはじめに長柄付銚子（柄杓：第５図 27 ～ 31、第６図 32）、兜鉢関係金具（第６図 33 ～ 47、第７図 48 ～ 62、第８図 63 ～ 71）、鎧金具（第８図 72 ～ 78、第９図 79 ～ 92）、刀剣類の鍔や切羽など（第９図 93 ～ 102、第 10 図 103 ～ 108）、石火矢の弾など（第 10 図 109 ～ 112）などの金属製品が出土しています。

その他に、ガラス小玉（ビーズや勾玉など：第 11 図１～ 13）や第 10 図 113 ～ 118 に図示した中国銭〔「至道元寶（北宋：初鋳造年 995 年）」、「治平元寶（北宋：初鋳造年 1064 年）」、「洪武通寶」（明：初鋳造年 1368 年）、「永樂通寶（明：初鋳造年 1408 年）」〕などが出土しています。

特殊な銭として同図 117 に掲載した厭勝銭〔出土品は孔郭が亀甲郭（六角形の孔）と推定〕と呼ばれる吉祥銭（文様不詳）が一枚含まれていました。

厭勝銭についての県外や国外の出土例では、「福禄壽昌」（韓国新安海底遺跡）、「天下太平」（長崎県鷹取海底遺跡）などの吉祥文字を施したものがあります。吉祥文字以外に吉祥文様：二羽の鳥が対となる雙鳥銭（北海道志海苔館跡）などを施した特殊な銭も出土しているようです。

倉庫跡出土の陶磁器類の破片資料は分類や接合・分析の結果、推定された個体数が 1,162 個体と判りました。その内訳は、中国産陶磁器 993 個体（85.5 %）、タイ産陶器及び土器（半練）の蓋 143 個体（12.3 %）、沖縄産瓦質土器の蓋 17 個体（1.46 %）、本土産の備前焼擂鉢と壺６個体（0.51 %）、ベトナム産陶器３個体（0.26 %）で構成されていました。

その他、金属製品及びガラス玉一括の点数は、802 点（内訳：ガラス小玉（水晶を含む）795 点、勾玉１点、ガラス小玉の塊６点）を数えました。その中でガラス小玉の塊（第 12 図 12）の一つには布目痕がみられました。恐らくガラス小玉は布袋に入れ丸櫃などの容器に収めて保管されていたものと考えられます。

４．「京の内」倉庫跡から出土した金属製品

１）出土した金属製品の種類

倉庫跡出土の金属製品を機能や用途で整理すると、以下のようなＡ～Ｇまでの７種類（第３図１～第 10 図 118）に分類できます。

A．工具類：（釘、鎹、鋲、錠、蝶番受け金具。第３図１～７。）

B．生産及び保管用具：（鍋、調度品の金具。第３図８～ 11。）

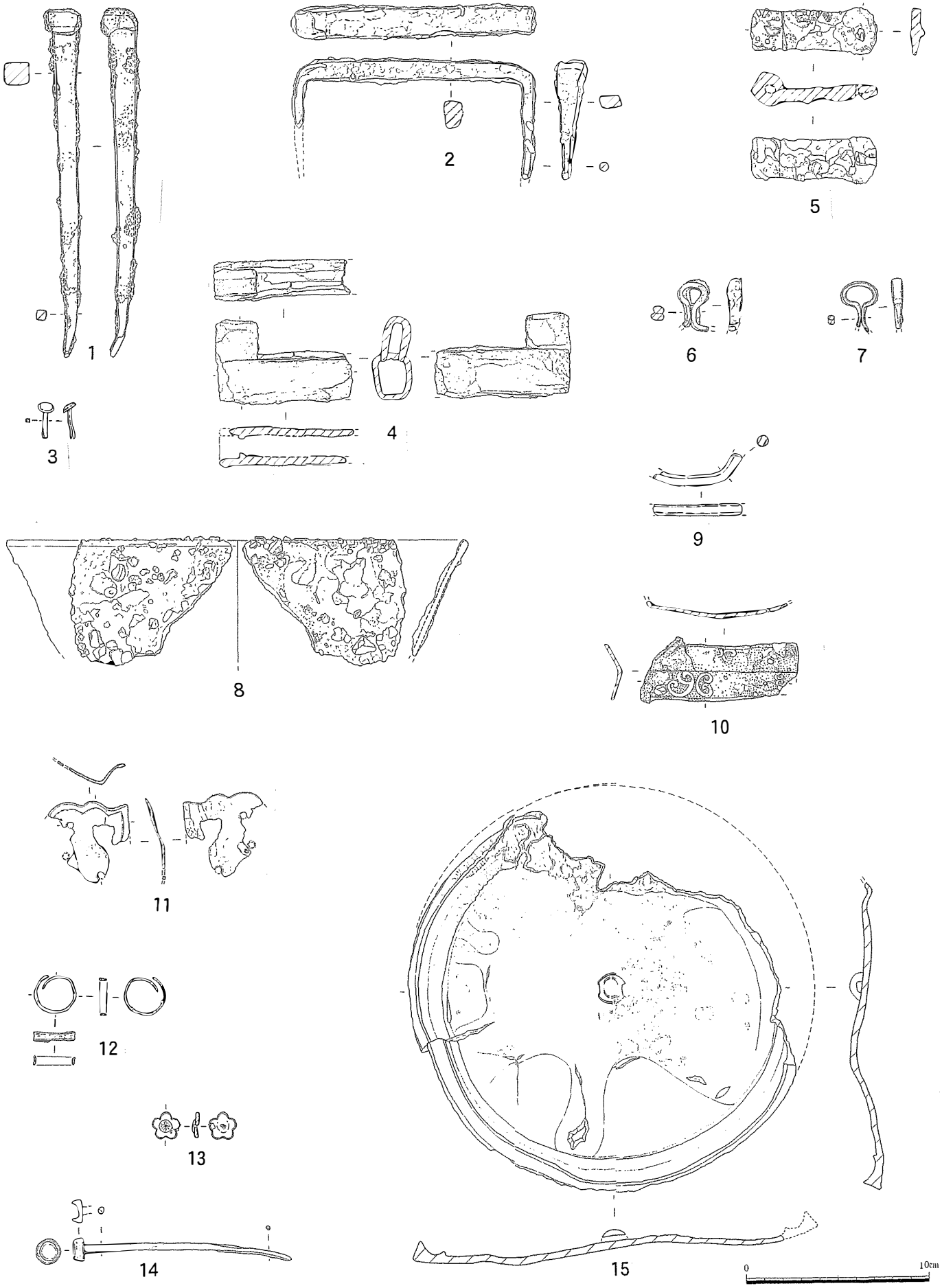
C．装身具：（指輪、簪。第３図 12 ～ 14。）

D．祭祀用具：（鏡、香炉、花瓶、鈴、柄杓。第３図 15、第４図 16 ～ 25、第５図 27 ～ 31、第６図 32。）

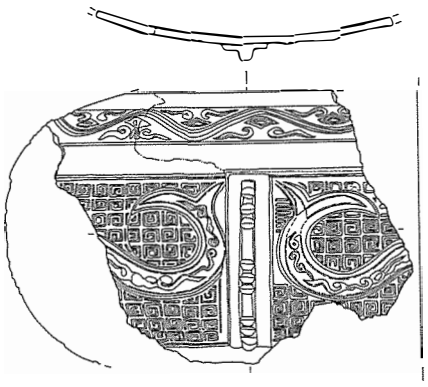
E．武　具：【兜鉢関係（斎垣・矧板・眉庇。第６図 33 ～ 43）、兜立物（三鍬形台・鍬形・祓立飾金具。第６図 44 ～ 47、第７図 48 ～ 62、第８図 63 ～ 71。）、鎧金具関係（札・鎖帷子・八双金具・据物金具・笠鞐・責鞐・籠手金具・立挙？・覆輪・総角付けの鐶座。第８図 72 ～ 78、第９図 79 ～ 92。）】

F．武　器：【刀剣類（鍔・切羽・目貫、薙刀の逆輪。第９図 93 ～ 102、第 10 図 103 ～ 108。）、石火矢関係（青銅製の弾・砲筒・筒の締め金具。第 10 図 109 ～ 112。）】

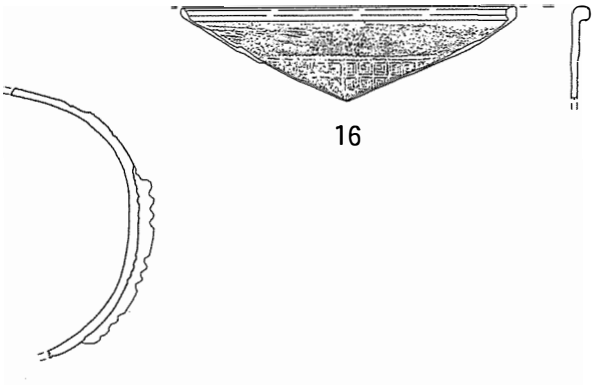
G．銭：中国銭、厭勝銭など（第 10 図 113 ～ 118。）



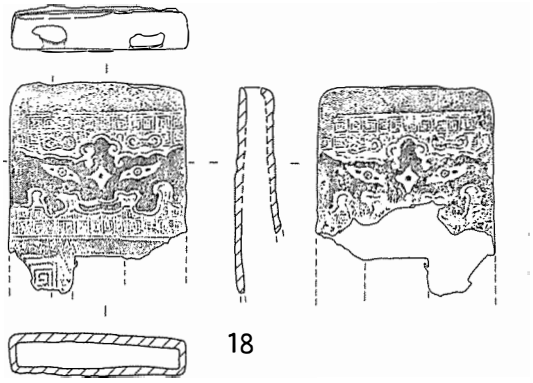
第３図 工具類（１釘、２鋸、３鋲、４錠、５蝶番、６・７受け金具）、生産及び保管用具（８鍋、９～11調度品金具）、装身具（12指輪、13・14簪）、祭祀用具（15鏡）



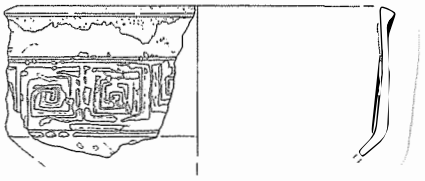
17



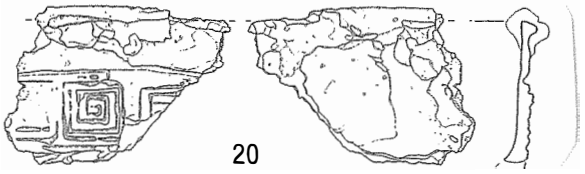
16



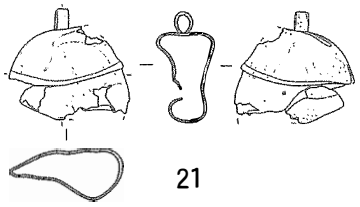
18



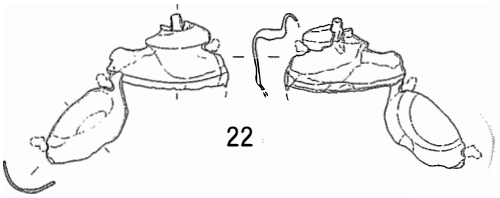
19



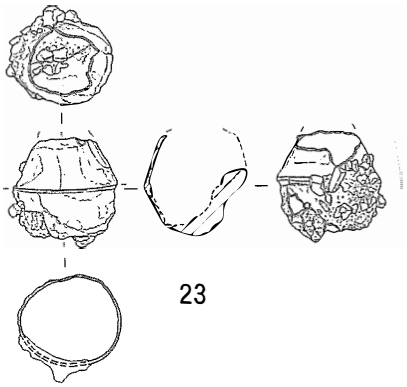
20



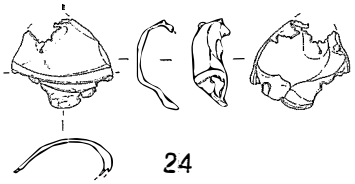
21



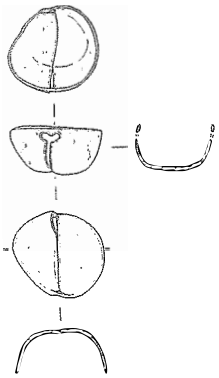
22



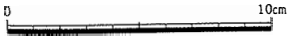
23



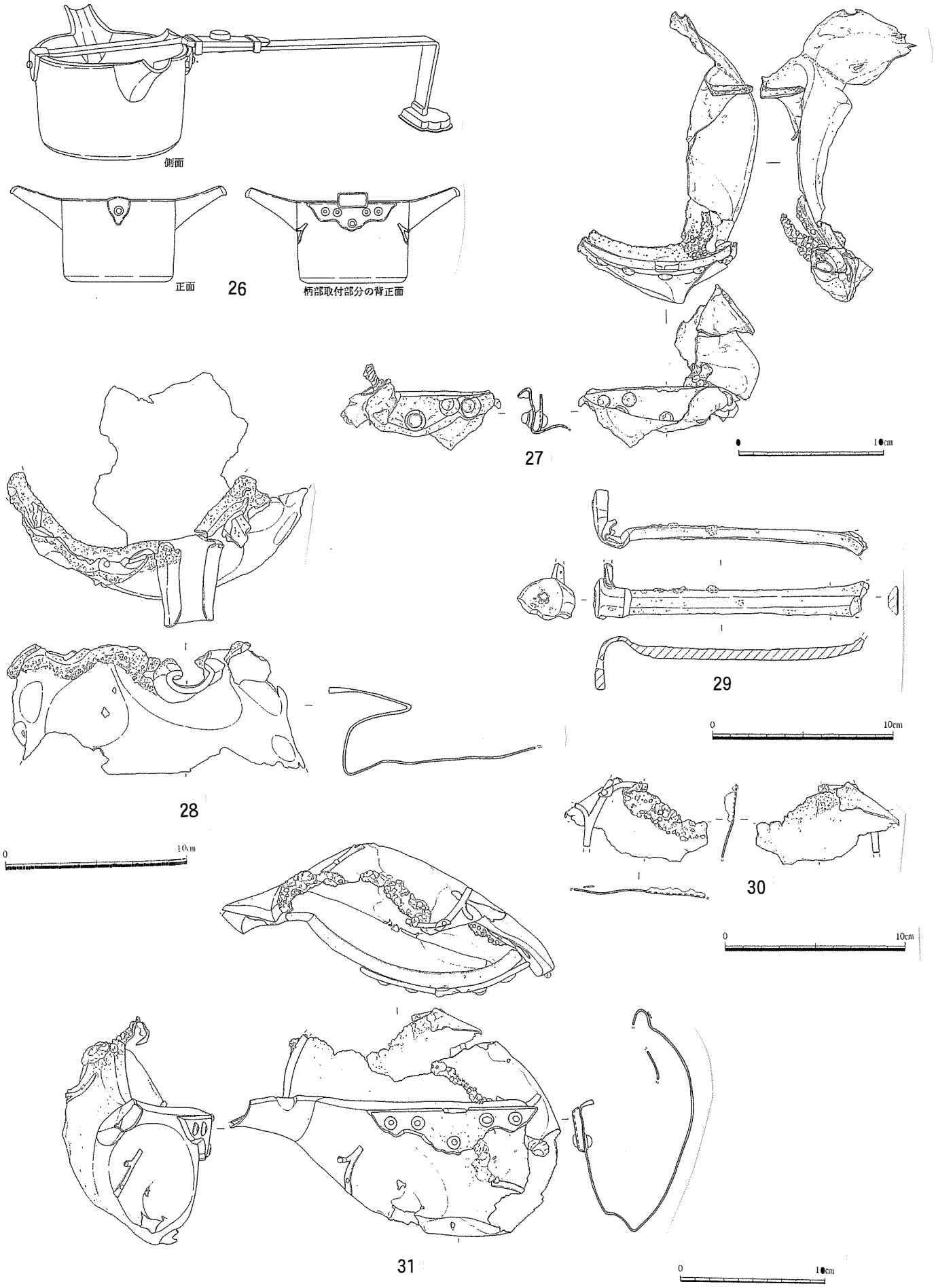
24



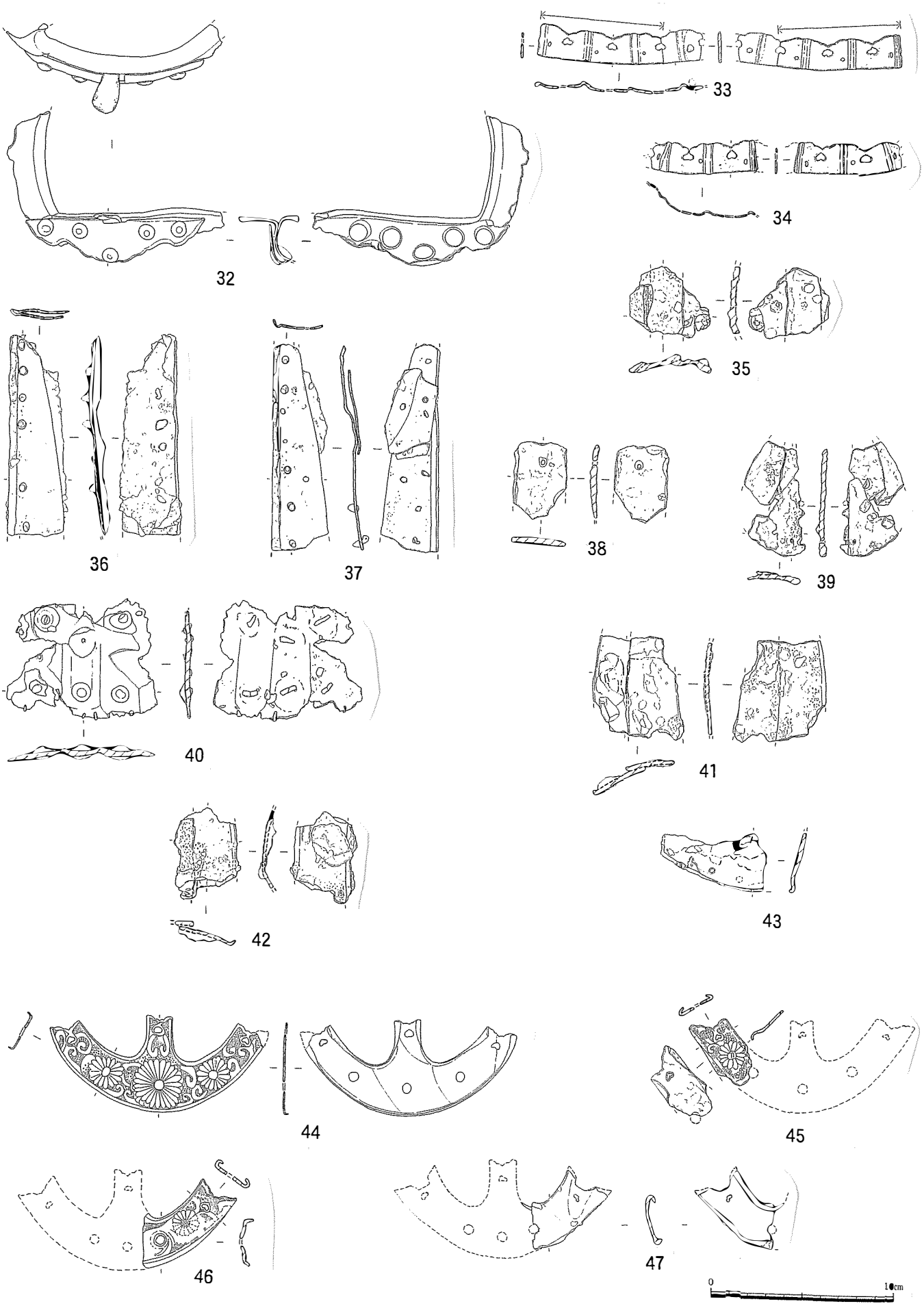
25



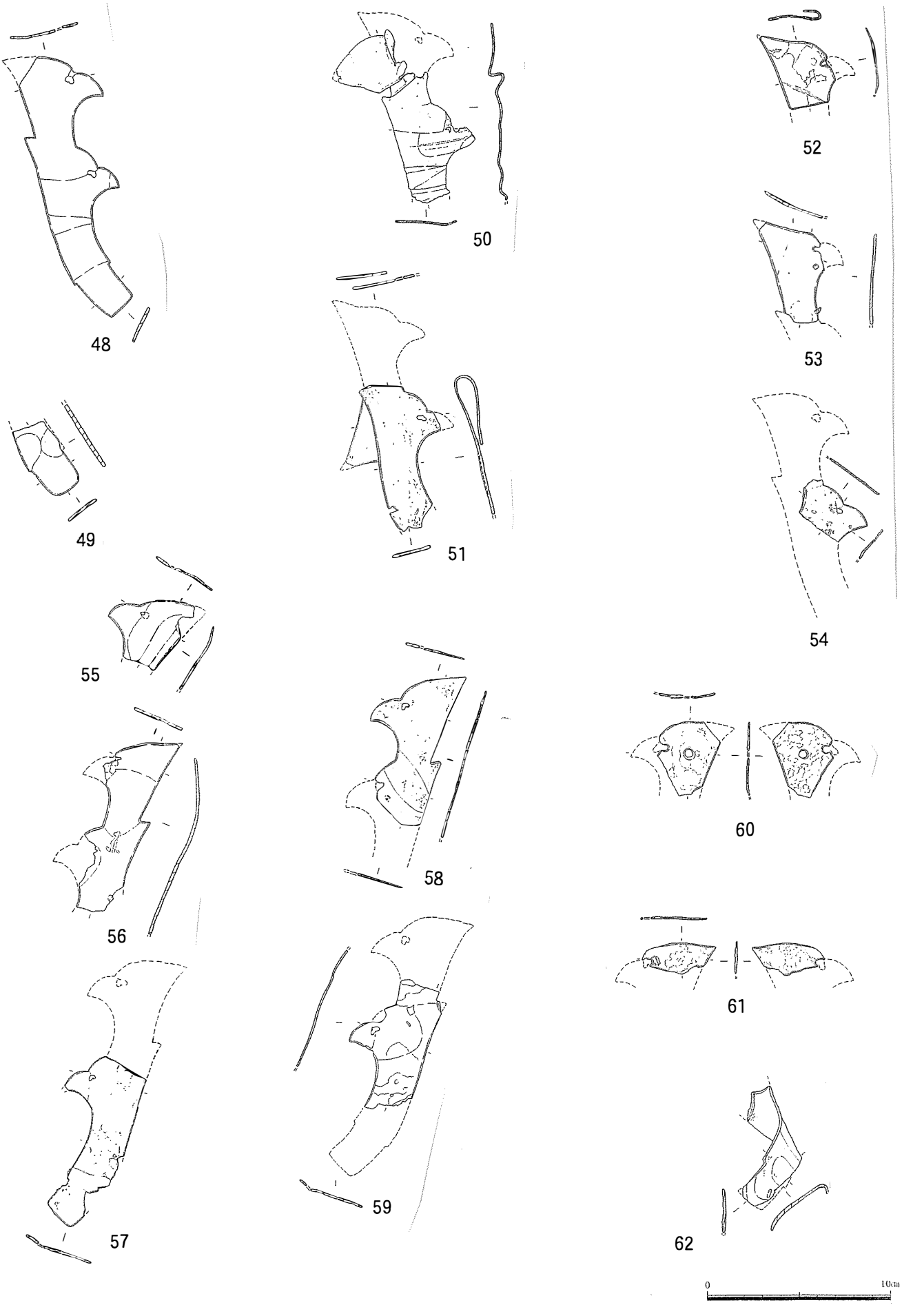
第４図 祭祀用具（16～18香炉、19･20花瓶、21～25鈴）



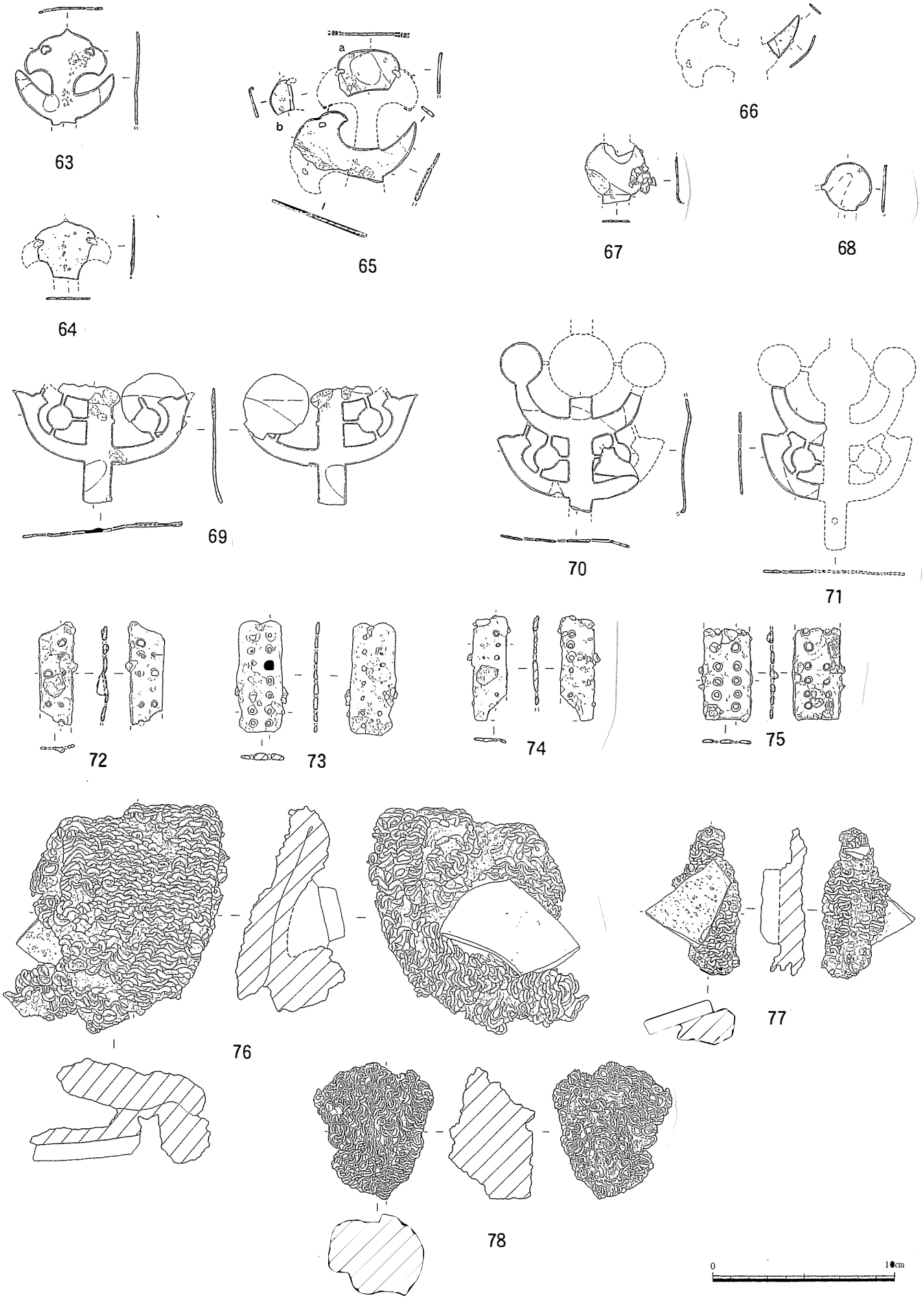
第５図 祭祀用具（26参考資料：長柄付銚子復元図、27～31柄杓）



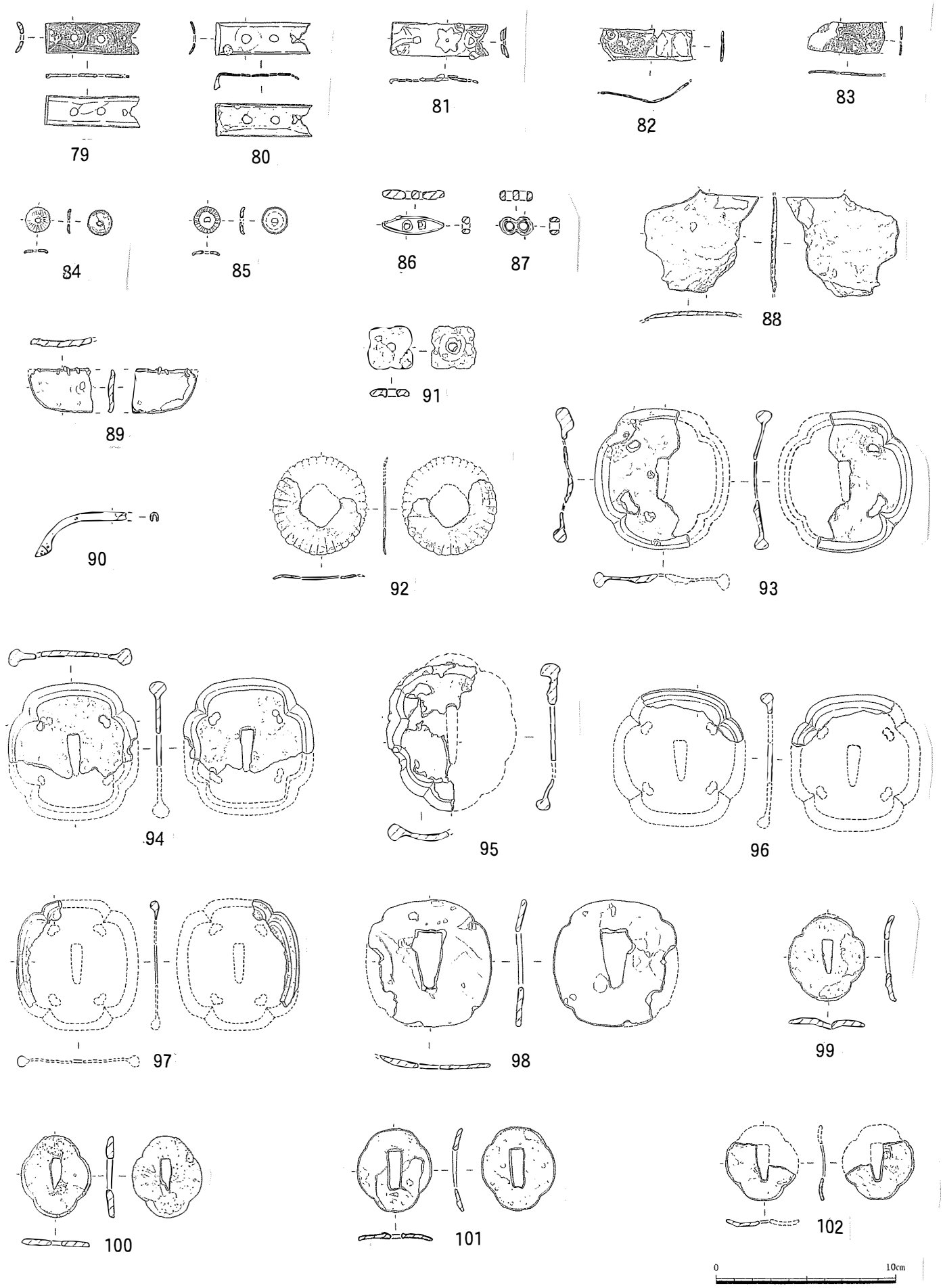
第６図 祭祀用具（32柄杓）、武具（兜鉢関係：33・34斎垣、 35～42矧板、43眉庇、
兜立物関係：44～47三鍬形台 ）



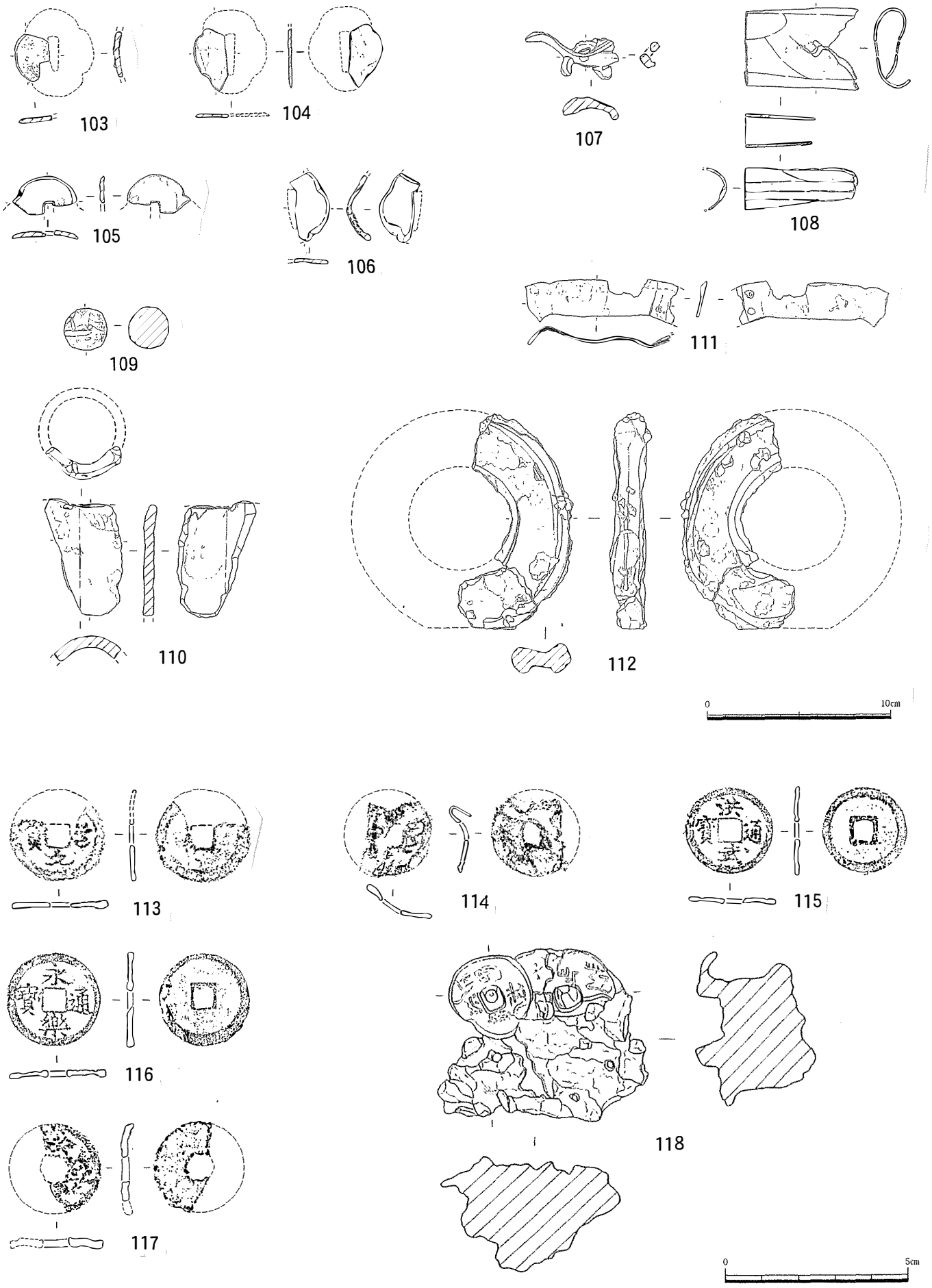
第７図 武具（兜立物関係：48～62鍬形）



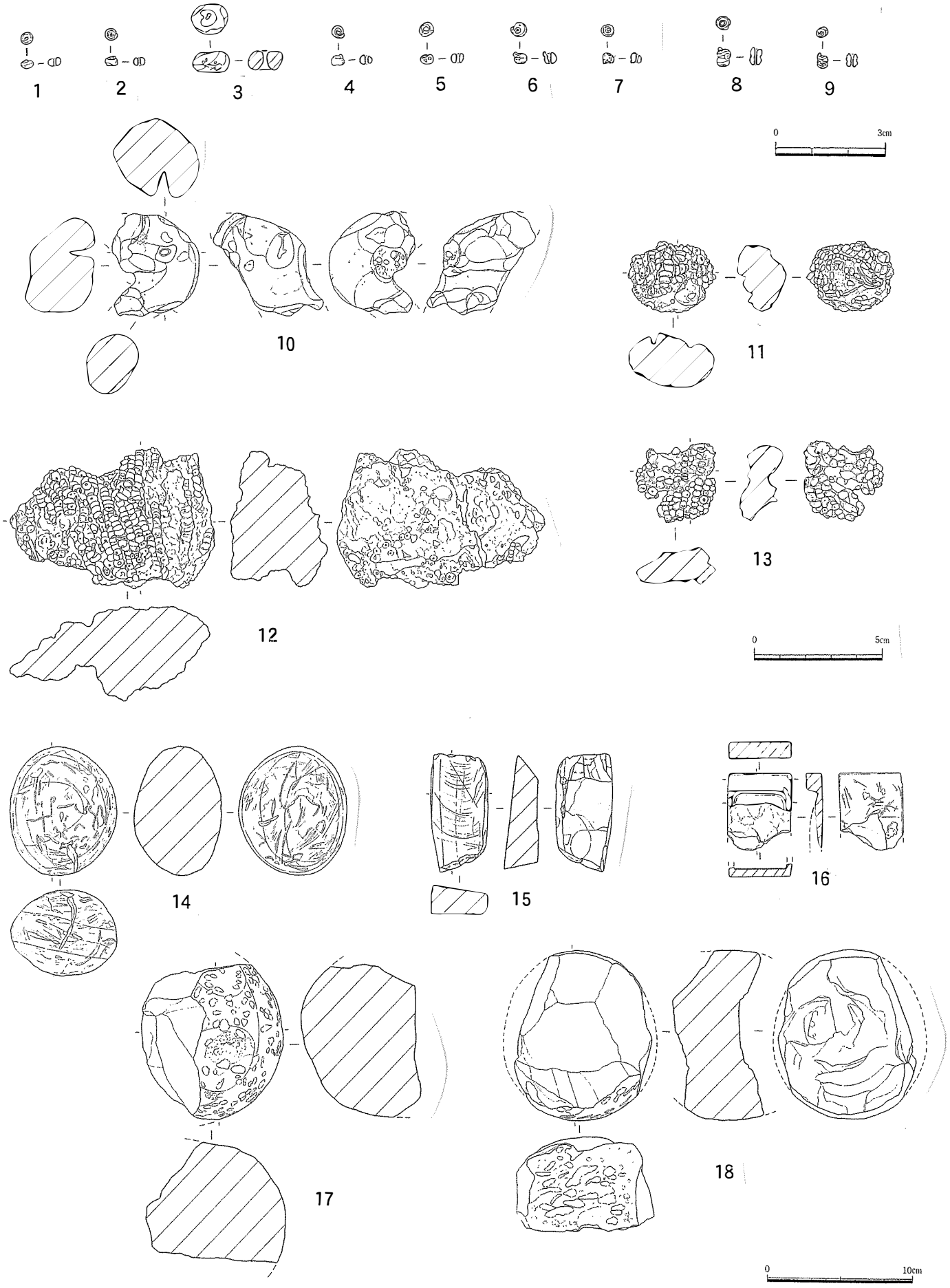
第８図 武具（兜立物関係：63～71祓立飾り金具、72～75札、76～78鎖帷子）



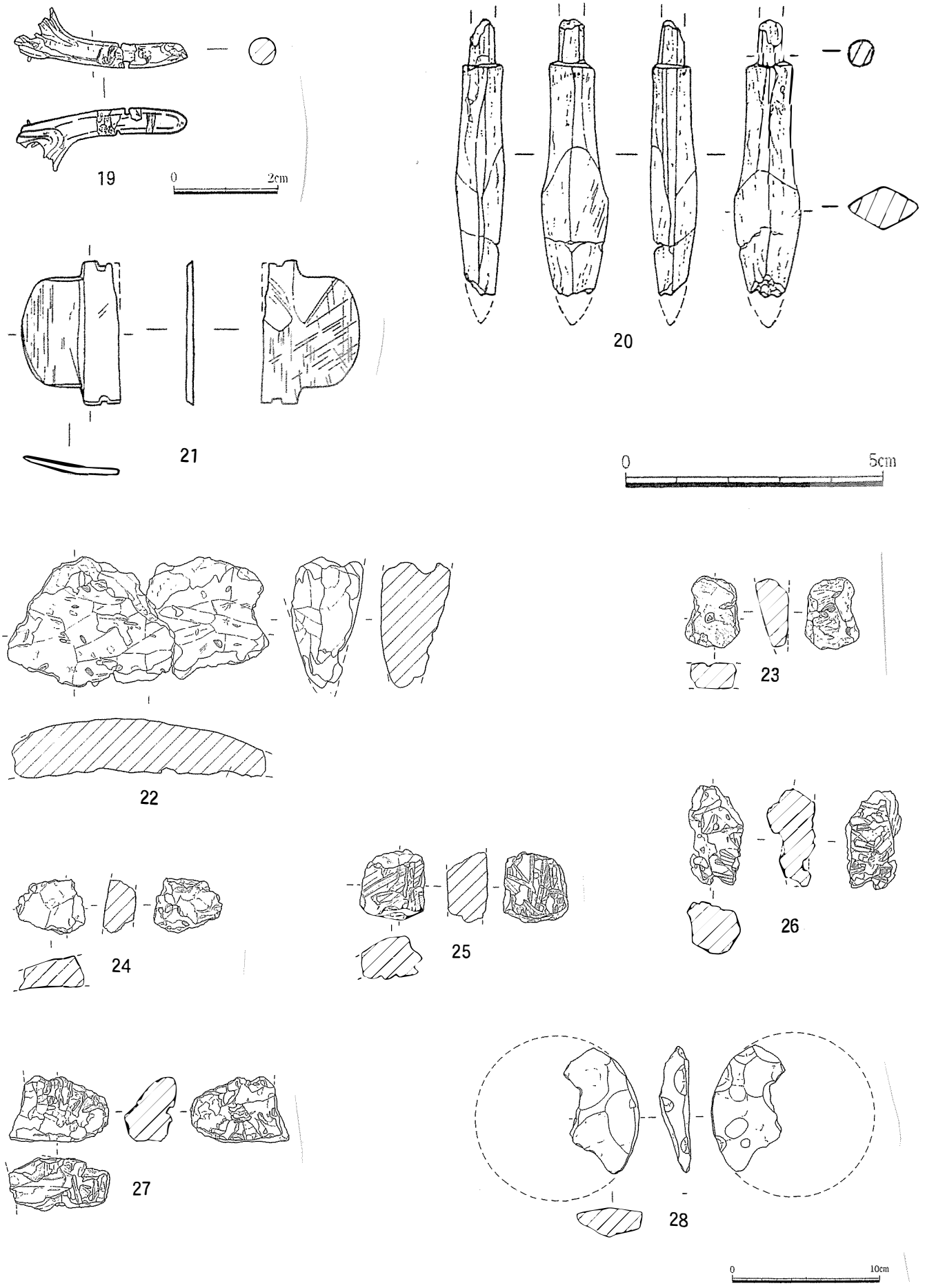
第９図 武具（鎧関係：79～83八双金具、84・85据物金具、86笠鞐、87責鞐、88・89籠手金具、90覆輪、91立挙？、92総角付けの鐶座）、武器（刀剣類：93～98鍔、99～102切羽）



第10図 武器（刀剣類：103～106切羽、107目貫、108薙刀の逆輪、石火矢関係：109青銅弾、110砲筒、111・112締め金具）、銭（113～118銭及び銭の塊）



第11図　1～9ガラス小玉、10火熱変形の勾玉、11～13ガラス小玉の塊、14磨石、15砥石、16硯、17・18石弾



第12図　19木製品髷物、20骨鏃、21骨製留め具、22～27土壁（炉壁？）、28羽口

2）『おもろさうし』にみえる主な金属に関する謡など

京の内での祭祀や儀式と関係が薄いとみられる武器類〔刀（鍔）・鎧（小札）・兜鉢など〕、そして祭祀や儀式と関係する香炉以外の長柄付片口銚子（柄杓）や鈴について『おもろさうし』(1532年～1623年編纂）から主な例を挙げてみます。

A．武器類〔刀（鍔）・鎧（小札）・兜鉢

第一巻「きこえ大ぎみがおもろ 首里王府の御さうし」

「あおりやへが節」

5「一 聞得大君ぎや 赤の鎧 召しよわちへ 刀うちい 大国 鳴響みよわれ
又 鳴響む精高子が 又 月代は さだけて 又 物知りは さだけて」

「あおりやへが節」

25「一 聞得大君ぎや 初め軍 立ちょわちへ 合あて 行きやり 敵 治めわちへ
又 鳴響む精高子が」

以上のような二首のオモロからも京の内での儀式の際に聞得大君が赤鎧や刀を儀式に用いていたことが容易に推察できます。なお、『おもろさうし』第三巻にも上記、番号5と同じようなオモロ（番号123）の謡があります。

B．長柄付銚子（柄杓）

京の内からこれまでに類例のなかった柄杓が3個体（第5図27･31、第6図32）出土しています。その具体的な用途について『おもろさうし』から二首取り上げてみると次のようのオモロがあります。

第六巻「うりでは大きみ御まへが節」

330「一 君加那志 夏 立てば 命神 このみしよわちへ 又 我が大里 夏 立てば 又
玉御柄杓 又 玉御ねぶ」

（大意：君加那志神女が、お祈りします。我が大里も、夏になると、神の恵みを受けて栄えるであろう。美しい立派な柄杓を神に捧げて、お祈りをしよう。）

第十六巻「あおりやへが節」

1134「一 勝連の阿麻和利 玉御柄杓 有りよな 京 鎌倉 此れど 言ちへ 又 肝高の阿麻和利 又 島知りの御袖の按司 又 国知りの御袖按司 又 首里 おわる てだこす
玉御柄杓 有りよわれ」

〔大意：勝連の阿麻和利、肝高の阿麻和利は、神酒を注ぐ玉御柄杓を持っているよ。大和の京、鎌倉にまで、これをぞ いい囃して鳴り轟かそう。島を、国を支配し治める高貴な按司様、首里にまします国王様こそ、神酒を注ぐ玉御柄杓を持ち給うのだ。（阿麻和利を首里の国王と並べて讃えたおもろ）。〕

以上のようなオモロから柄杓は、単なる水汲みや酒を入れる容器ではなく、宗教的な意味合いをもった特殊な霊力、或いは不可視の霊力を象徴すると同時に、各地の按司が柄杓を保有することは一種の権力象徴（ステータス・シンボル）であったことがオモロから窺えます。他に、『おもろさうし』には柄杓に関するオモロが7首確認できます。

C．鈴

京の内倉庫跡から青銅製の鈴が5点（第4図21 ～ 25）出土しています。県内遺跡での鈴の出土例は今帰仁城跡志慶真門郭（1点）や天界寺跡（1点)などから得られていますが、まとまった数としては京の内が多いようです。『おもろさうし』には神女に鈴を冠した名称が散見されます。祭祀や

儀式の際に実際に鈴を使用した神女がいたのかも知れません。

神女名に鈴の名称がついた例を『おもろさうし』から抜き出すと次ぎの名称が記載されています。第五巻 226 番に「嶽の鈴鳴り」、第十三巻 790 番「鈴金」、第十五巻 1095 番「賀数鈴鳴り」があります。

ところで神道における鈴の持つ意味合いは「魔除けの霊力」、『神霊の力で罪穢れを祓い清める「鈴祓い」』或いは、巫女が神前で神楽舞を舞うときに、手にもって鳴らす神楽鈴の音（清らかな音色）で神を招来する役割と神への合図として祈願をおこなうような儀式などから考えると鈴の用途が理解できるようです。

『おもろさうし』の中で実際に鈴を謡った例を挙げると以下のようなオモロがあります。

第十一巻「しのくりやわよなれがみの節」

672「一 みるや仁屋は、世馴れ神やれば、・・・金若子 紐鈴は 下げて 又 金みさき 鳴り鈴は 下げて」

（大意：みるや仁屋は、世馴れ神、・・・金若子、かねみさきに美しい紐鈴、鳴り鈴を下げている。）

※金若子・かねみさきは、刀の美称で、この刀の装飾品として紐付きの鈴を下げている。

このオモロにみえる刀の装飾品として紐を付けた鈴が謡われているが、鈴が刀に着装された箇所を考えた場合、刀の柄頭の猿手（第 15 図参照。刀の柄の先端に取り付けられた輪っか状の金具）に紐を通して鈴を下げた可能性が高いようです。

5．兜鉢立物飾り金具と兜鉢

倉庫跡から兜鉢の前面に取り付けられた立物の破片 29 点（その内、三鍬形台４点を含む）が出土していました。これらの資料を基にして第 13 図 11 のように立物飾り金具が復元できました。立物飾り金具は本来、銅の地金の上から腐食防止を兼ねて鍍金（金メッキ）を施していますが、京の内資料は火災によって鍍金が焼失したようです。

この立物飾り金具の復元に際し、文様構成や民俗事例及び文献資料を参考にしながら立物飾り金具（三鍬形台中央にある祓立の中に入る飾り金具の主体となる文様から）に「瑞雲日月星文」と名称を付けました。

1）立物飾り金具「瑞雲日月星文」

立物飾り金具「瑞雲日月星文」の文様意匠を解きほぐす為、便宜的に第 13 図 11 の推定復元図の中央最上位から下位へ、そして左右に番号を付けて説明をします。

①「雲」：ニライ・カナイの固有信仰や思想などから「吉祥をもたらす雲」、仏教や道教の「如意」や「如意頭」と酷似。

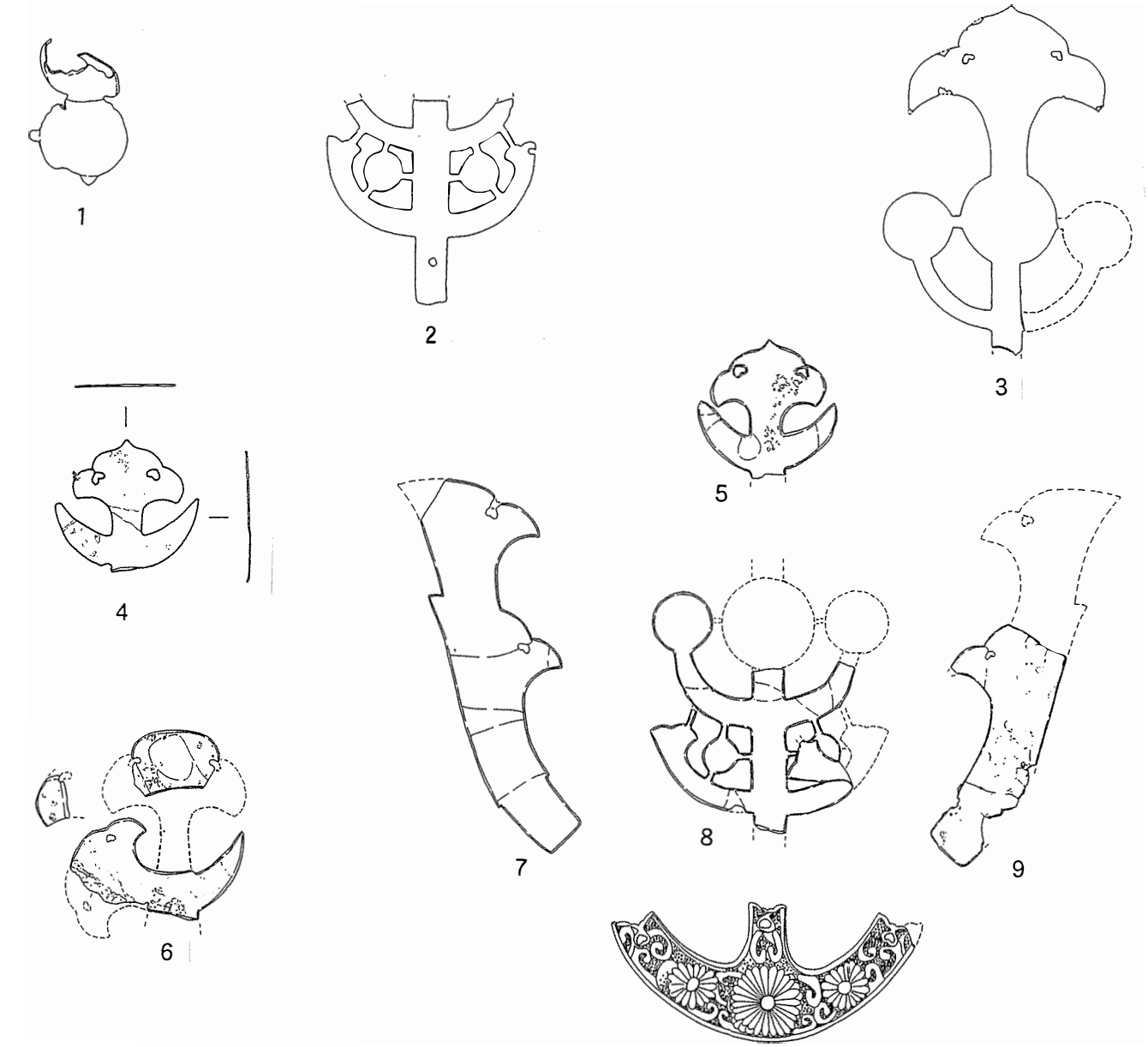
②「月」：月神（月）。「月しろ」は月の異名で神名。神女名として「月」を擬人化して「月しろの大主」。女神。「月」を三日月（日輪と区別する）で表現。

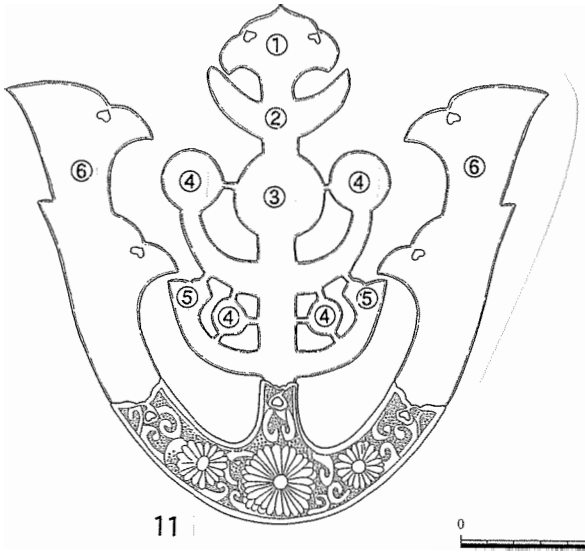
③「日（日輪）」：日神（太陽）。テダ思想。地方の按司（豪族）の意味表現が統一国家の成立により国王を表現。男神。日輪を大きな円で表現。

④「星」：「子ぬ端星（北極星）」・「七つ星（北斗七星）」・「三つ星（オリオン座の三つ星）」などの星信仰。文様の星の配置から「大ヨチヤ星（ペガサス座の大四角辺形）」を表現か。航海・農業との関連。

⑤「植物」：稲・麦などの農作物の豊穣を祈願して新芽を表現か。

⑥「鍬形」：鍬形の源流は、鹿の角。日本では鹿角は左右均整で形が美しい事から古くから角を飾り物として兜の前立物に使用。中国では「福禄寿」の「禄」と同音同声で、長寿の仙獣であり、象徴とされる。





①：「雲」。瑞雲。
②：「月」。月神。女神。
③：「日（日輪）」：日神（太陽）。按司・国王。テダ思想。
④：「星」：星信仰。
⑤：「植物」：稲・麦などの農作物豊穣祈願。
⑥：「鍬形」：鹿の角。中国では鹿は、長寿の仙獣。

第13図 首里城出土の立物（1・2南殿跡出土、3北殿跡出土、4西のアザナ跡鍛冶・鋳造工房出土、5～10京の内倉庫跡出土）、11京の内倉庫跡出土の立物復元図

以上のように立物の意匠は、管見の限りにおてい本土での類例が確認されていない事と西のアザナ地区の発掘調査より青銅製品の加工生産（羽口、金鋏、坩堝、鋳型）や銭の鋳造の痕跡を示す出土品の他に京の内と同じサイズの「瑞雲」・「月（三日月）」のある鍍金された立物飾り金具（第13図４）の破片が出土している事などから琉球王国で独自に製作されたものと考えられます。

２）その他の兜鉢立物飾り金具

京の内からは、前記した立物飾り「瑞雲日月星文」（第13図５・７～10）以外に同図６に図示した「瑞雲」先端の尖りがなく丸くなった瑞雲と「月（雲隠れの三日月）」を組み合わせたものが出土しています。

更に、首里城南殿跡からは「月」・「日（日輪）」（同図１）及び「星」・「植物」（同図２）の立物飾り金具の破片が、そして北殿跡からも同図13に図化したように「月」を省略した「瑞雲」・「日（日輪）」・「星」を組み合わせた立物飾り金具が出土しています。

以上のような立物飾り金具の出土例からすると首里城内で三種類（同図３～６）の立物飾り金具が製作されていた事が推定できます。城内での立物飾り金具の加工生産場所は、前述した西のアザナの青銅製品加工生産地域一帯が考えられます。

その他、兜鉢立物飾り金具の県内遺跡での出土例は、うるま市勝連城跡東の曲輪から出土した大型の「月（三日月）」のある破片１点と同市具志川グスク出土の「日（日輪）」のある破片１点があります。

３）兜鉢について

兜鉢の矧板破片（第６図35～42）が８点（鉄製３点、鉄製と青銅を組み合わせたもの５点）が出土しています。兜鉢の鉄製矧板の上から青銅製の矧板を重ねて鋲で固定する二重構造の兜鉢の破片資料が５点（第６図36・37・40～42）が確認されています。鉄と青銅の矧板を組み合わせた二重構造の兜鉢に関しては、今のところ琉球独特の技法ではないかと考えられます。恐らく兜鉢表面の青銅製矧板には錆止めを兼ねた鍍金が施されていたもの考えられます。この状況からすると立物飾り金具と兜鉢の一部には、黄金の兜〔鍍金された兜鉢と鍍金の立物及び立物飾りの組み合わせも考えられます。〕の存在を示唆し、その可能性は充分に考えられます。本土から輸入された鎧や兜の中には、琉球独自の意匠を追加（加工）して儀式などに使用したり、或いは、中国への交易品として「Made in Ryukyu」名で輸出していたことが可能性として考えられます。

本土から輸入された鎧について、『おもろさうし』の中に次のようなオモロが謡われています。

第二巻「きたたんよのぬしの節」

60「一 屋宜から 上る 直垂や 鎧 誰が 着ちへ 似せる 按司襲いてだす 召しよわちへ 似せれ 又 比嘉から 上る」

注釈：屋宜（港）から（中城に）上る。直垂・鎧（大和から輸入された飾り武具。権力の象徴となる。）按司襲いてだ（按司様。王様。「てだ」は太陽の意で、按司、王の尊称ともなる。）

（大意：屋宜、比嘉から上る直垂や鎧は、誰が着てふさわしいだろうか。按司様こそ召し給いてふさわしいのだ。）

６．おわりに

首里城京の内倉庫跡から出土した金属製品の一部については、平成16・17（2004・2005）年度に文化庁の補助を受けて保存処理と保管用桐箱を作成しました。

今回、報告した資料の大半は今後、文化庁をはじめ関係機関との調整を行いながら保存処理計画の立案と、計画に基づいた保存処理を実施して適切な管理と公開ができるようにおこなっていきた

いと思います。

倉庫跡からは陶磁器類、金属製品、ガラス製品（第 11 図１～ 13)、沖縄産瓦質土器の蓋、以外に朱漆の塗膜片、磨石１点（同図 14)、砥石１点（同図 15)、石弾２点（同図 17・18)、小型の硯１点（同図 16)、木製品（第 12 図 19：髷物の骨組部分１点)、骨製品２点（同図 20・21：骨鏃１点・留め具１点)、土壁？６点（同図 22 ～ 27)、羽口１点（同図 28）が出土している。

京の内倉庫跡から今回、琉球独自の意匠をもった兜鉢に取り付けられる立物飾り金具「瑞雲日月星文」が確認できた事は大きな成果でもあります。また、鉄製の兜鉢に青銅を被せた二重構造に加工した兜鉢の存在などから黄金の兜が存在していたのではないかと考えています。

ところで琉球王国の神祭や神事については、真栄平房敬氏の著書である『首里城物語』に次のような記載があります。首里城正殿の二階が大庫理と称され、東南隅の「おせんみこちゃ」と称された部屋に「御日の御前（日神)」、「御火鉢の御前（火の神)」に国王親族の繁栄や国家の安穏などを国王が女官を従えて固有信仰の神に参拝をした。また、夏至や冬至に日に首里城内で天地を祭る国王の親祭があり、中国皇帝が天壇で天を祭り豊作を祈ることに習った天地御祭があった事を記し、尚泰王の末子尚時が名代となって昭和 19（1944）年まで天地御祭が継承されていたようです。

その他に明治末期に、聞得大君御殿の祭神を中城御殿に遷座した際、二階の南側の別室を天地を祭る聖所を「天地の御側」と呼び、天地の神に祈る場所があったが、それを拝む対象物や祭壇もなく。ただ天空だけが拝される窓辺に黄塗りの台がすえられ、その上に天に向けて香炉が一つおかれているだけであったと言われている。・・・板書の祈願文は「天神の御神々の御慈悲、御元祖の御功徳により・・・国中諸離れに至まで、陰陽五行おそなわり賜り、毛作（ムジュクイ。諸作物）の世果豊（ユガフウ)、諸船の嘉利吉（カリユシ)、これひとへに御神徳の至りと仰ぎ賜り候。」

以上のような事からも琉球王国の祭事や儀式に関して、琉球固有の信仰を基本にして中国の影響などを受けながら「日神」・「月神」などの天地の神々や火の神、水の神など万物の神々、そしてニライ・カナイの神々にたいしての祭祀や儀式が執り行われていたことが理解できます。

主な引用及び参考文献

1．仲松弥秀『古層の村』沖縄民俗文化論　タイムス選書４　沖縄タイムス社　1977 年。

2．宮城栄昌「「おもろ」の神女名考」沖縄国際大学文学部 紀要 社会学科篇第７巻第１号 1979 年。

3．日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料 明實録之部１』国書刊行会 1979 年。

4．笹間良彦 『図録 日本の甲冑 武具事典』柏書房 1981 年。

5．知花春美・名嘉真宜勝「沖縄本島の針突き習俗分類」『沖縄の成女儀礼－沖縄本島針突調査報告書－』読谷村教委委員会・読谷村立歴史民俗資料館 1982 年。

6．嘉手苅千鶴子「月しろ」『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983 年。

7．伊波普猷「つきしろ考」『をなり神の島１』全２巻 東洋文庫 227 平凡社 1989 年。

8．真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社 1991 年。

9．比嘉 実『古琉球の思想』タイムス選書Ⅱ５　沖縄タイムス社 1991 年。

10. 當眞嗣一「火矢について」『南島考古』第 14 号（学会創立 25 周年記念特集号）沖縄考古学会 1994 年 12 月。

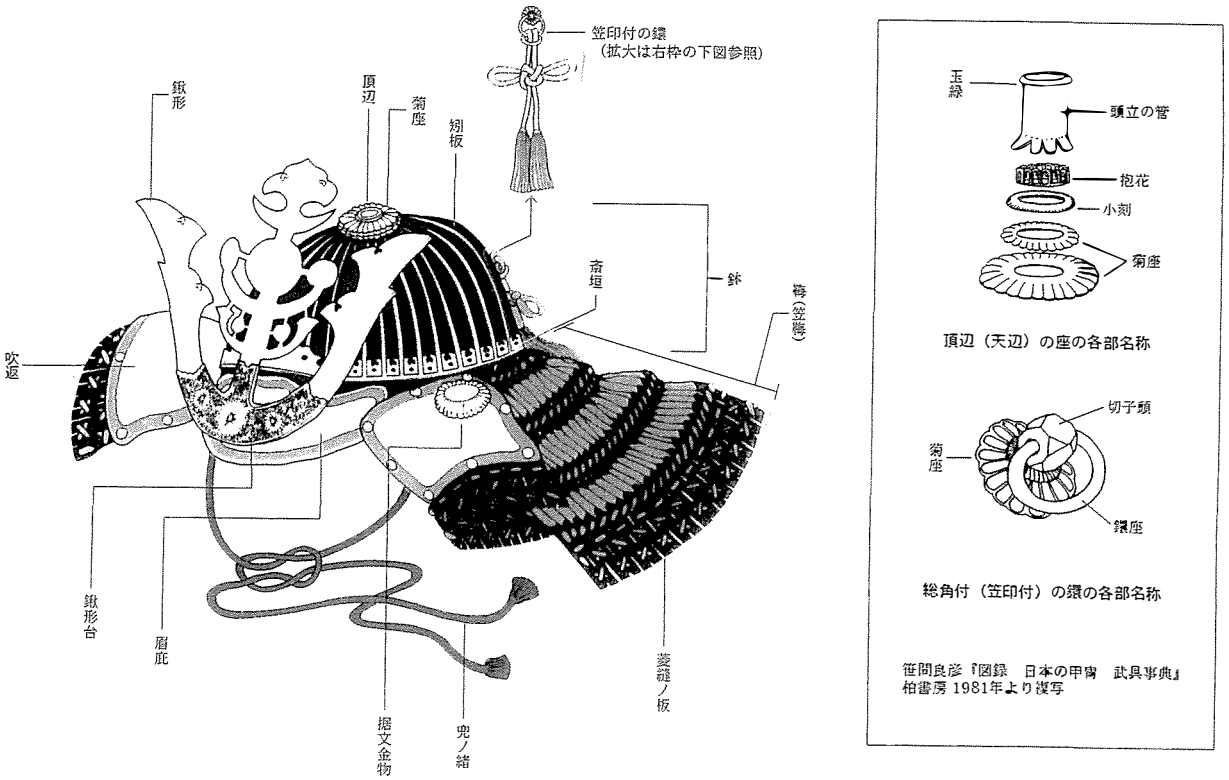
11. 黒島為一《史料紹介》『星圖』『天気見様之事』『星見様（仮題)』『八重山博物館紀要』第 16･17 号合併号 石垣市立八重山博物館 1999 年。

12. 外間守善校注『おもろさうし』（上・下）〔全２冊〕岩波書店 2006 年。

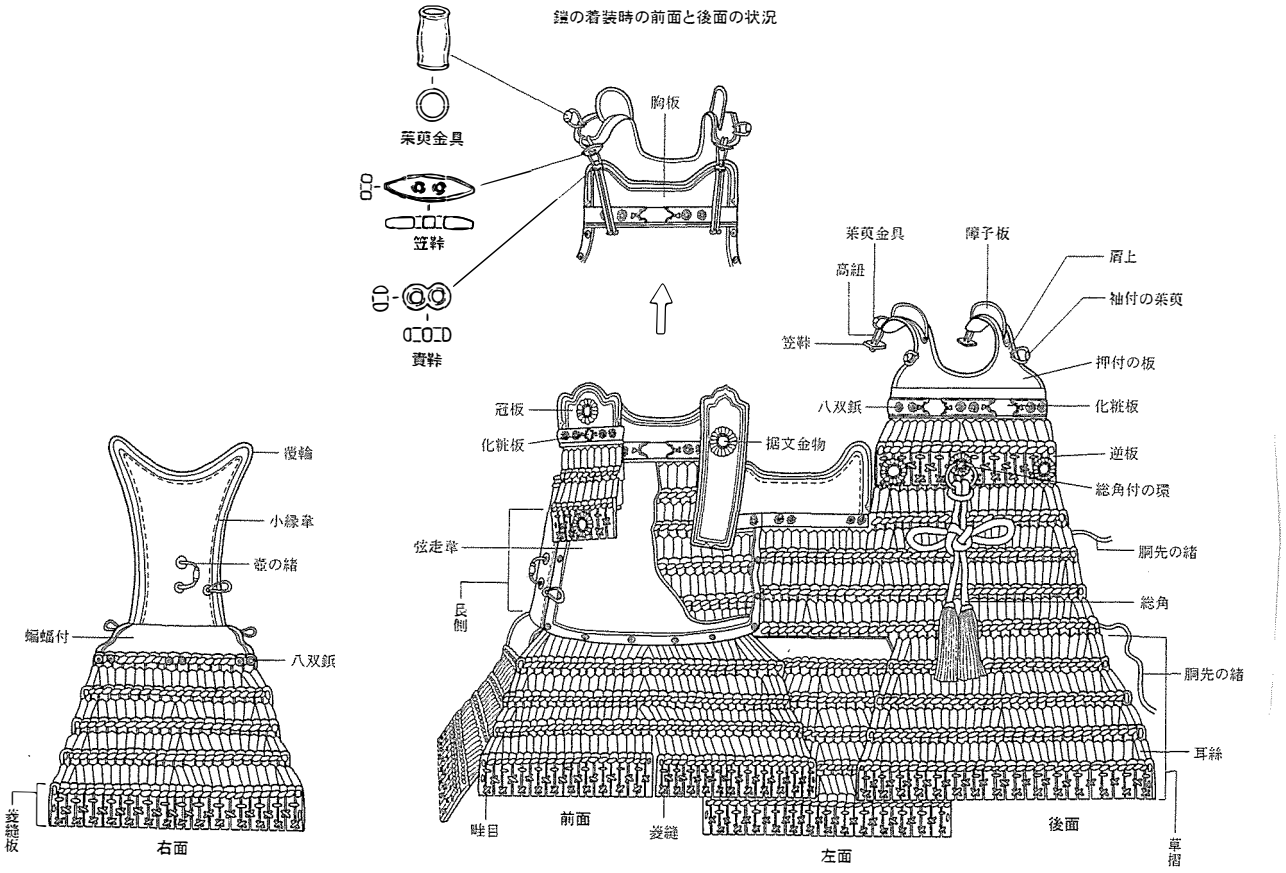
13. 菅田正昭『学校で教えない教科書 面白いほどよくわかる神道のすべて』日本文芸社 2007 年。

14. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』2009 年。

15. 上原 静「首里城西のアザナ跡の鍛冶・鋳造工房」『紀要 沖縄埋文研究６』県立埋蔵文化財センター 2009 年。

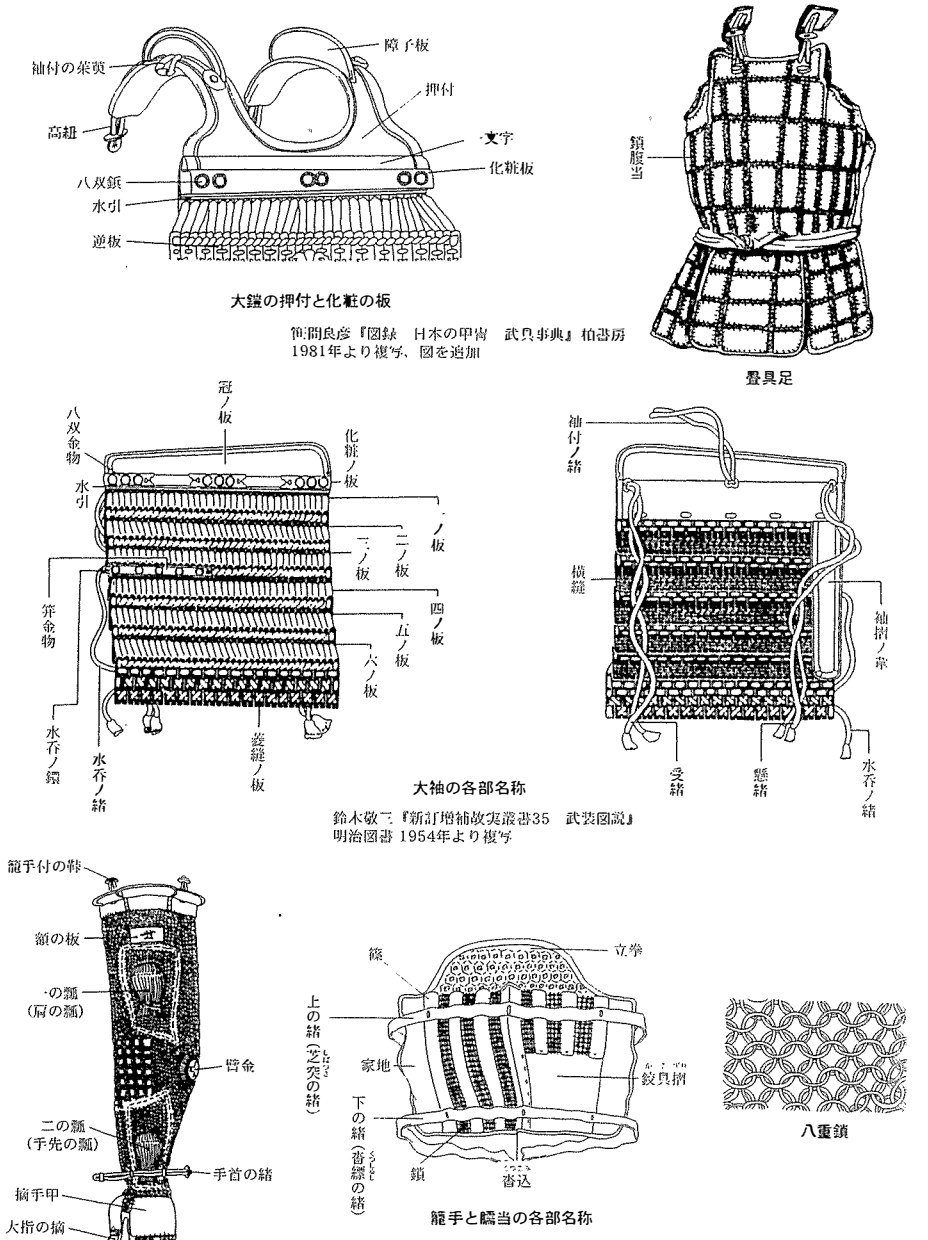


第１図 兜及び立物の各部名称と頂辺の座及び総角付の鐶の各部名称

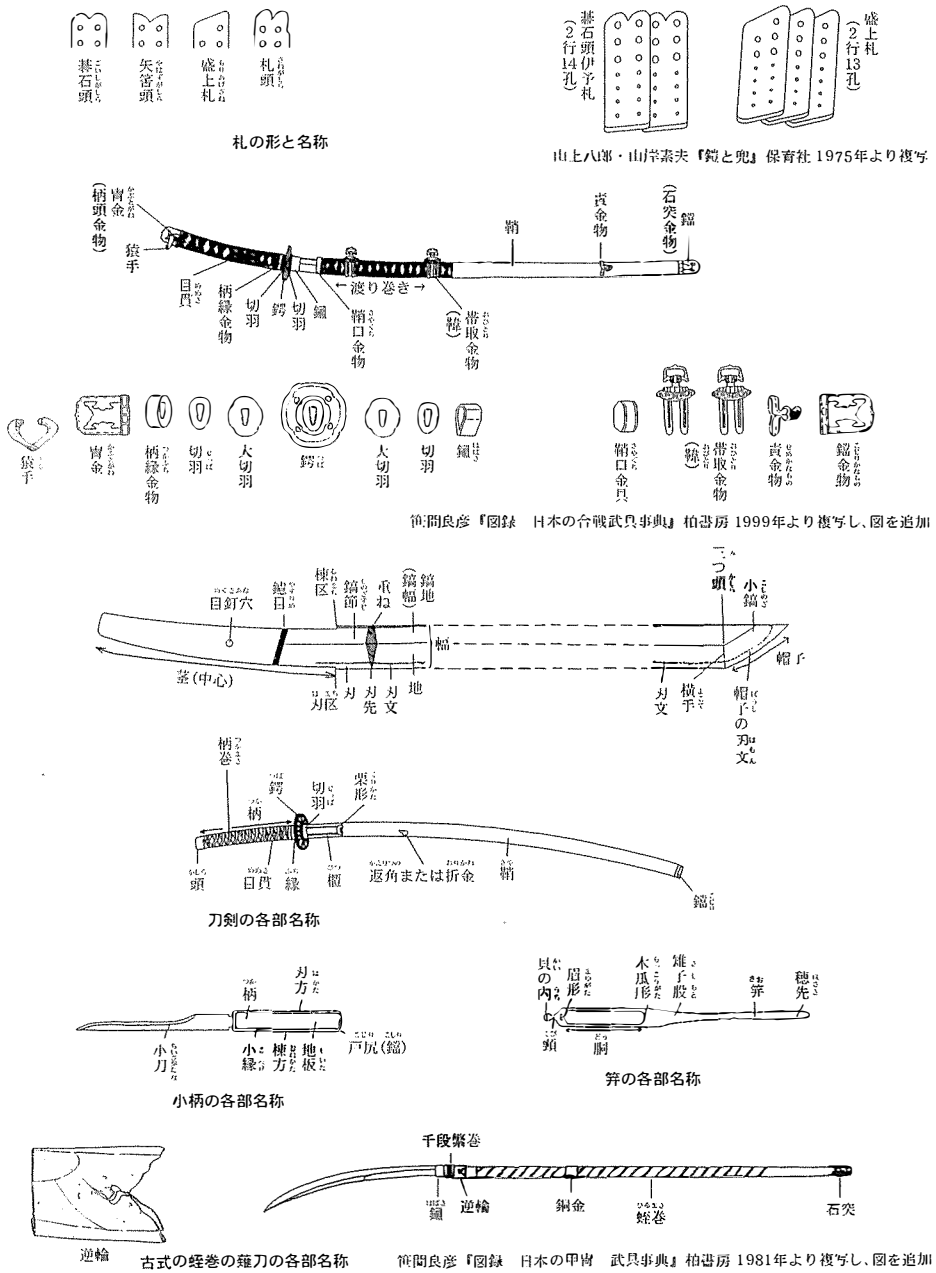


第２図 大鎧の各部名称（原図：金城亀信）

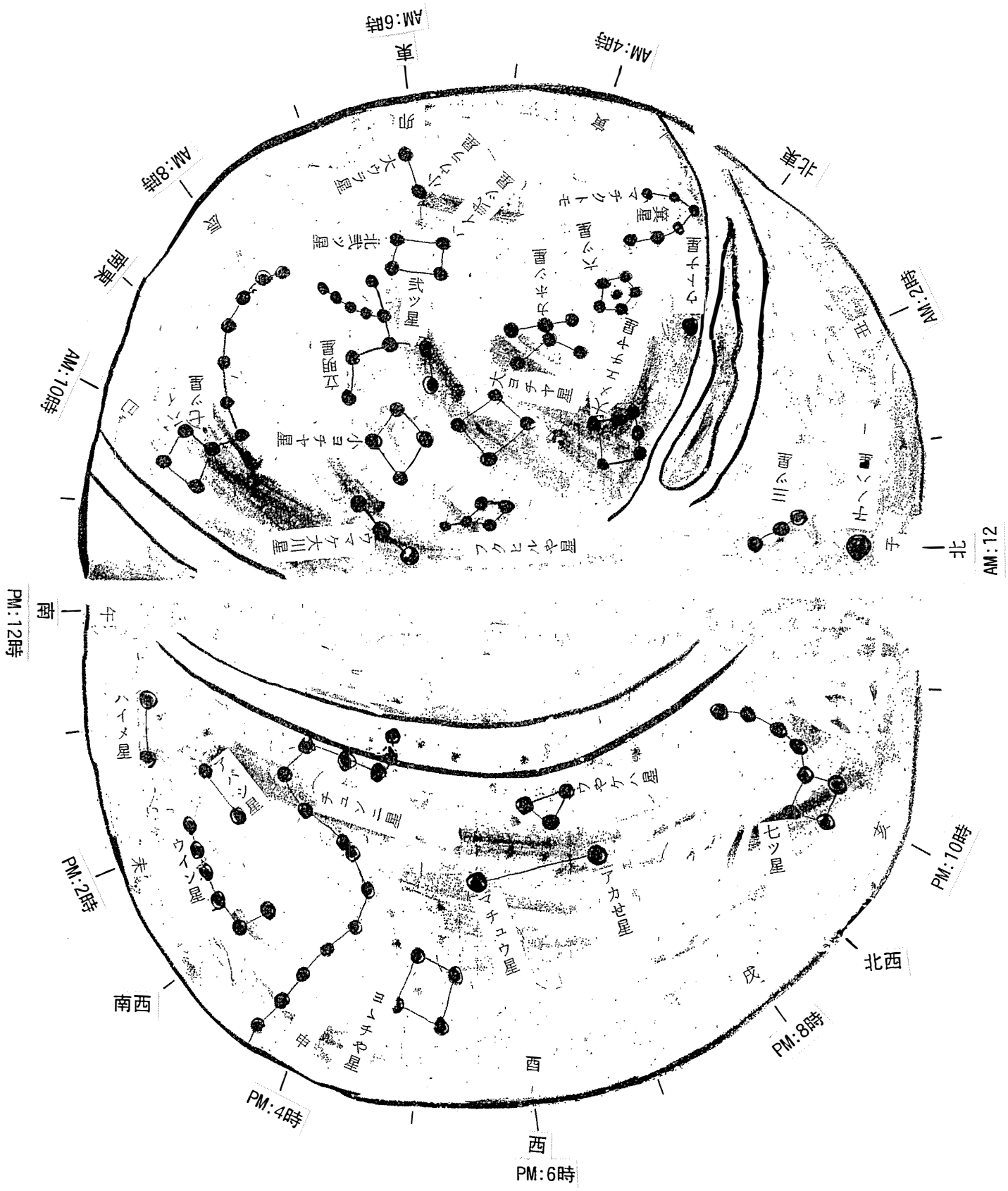
第14図　『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
第49集 2009年３月より



第３図　鎧の各部名称（詳細）、畳具足、八重鎖



第４図　札の形と名称、刀剣及び付属品（小柄・笄）・薙刀の各部名称

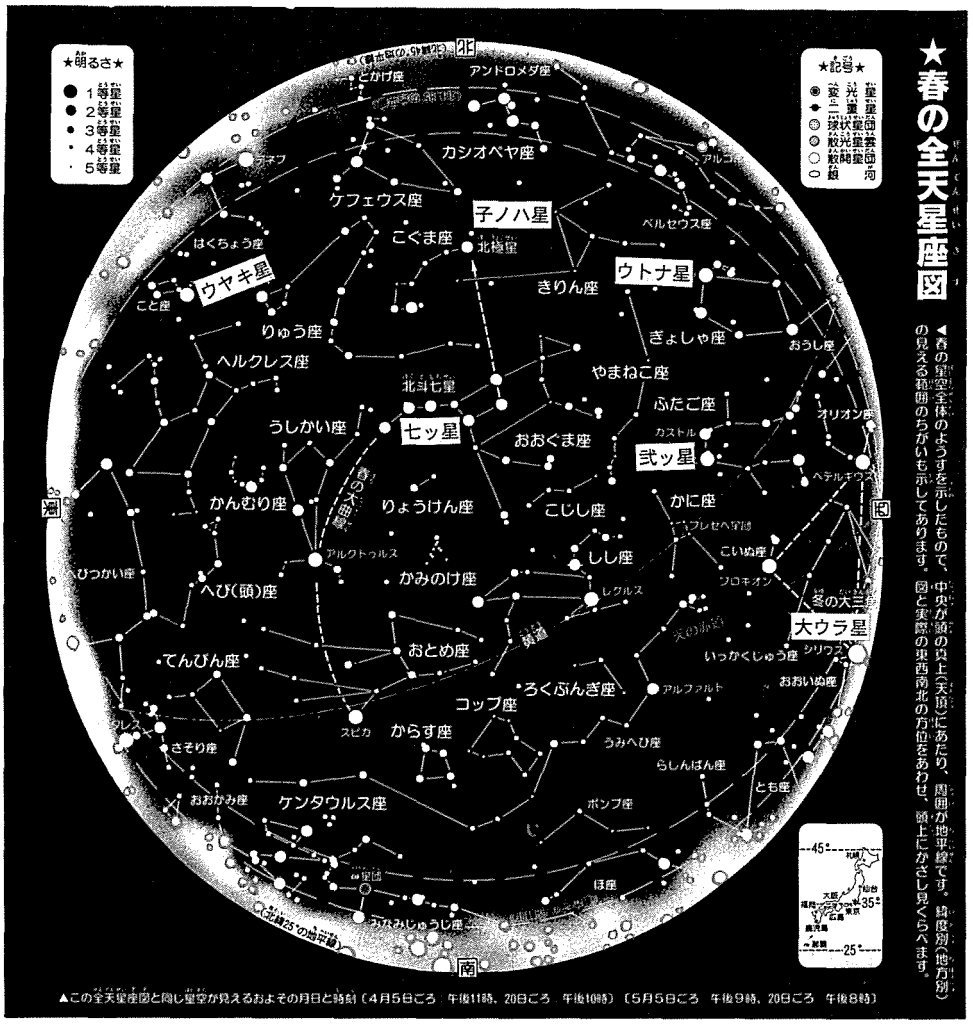


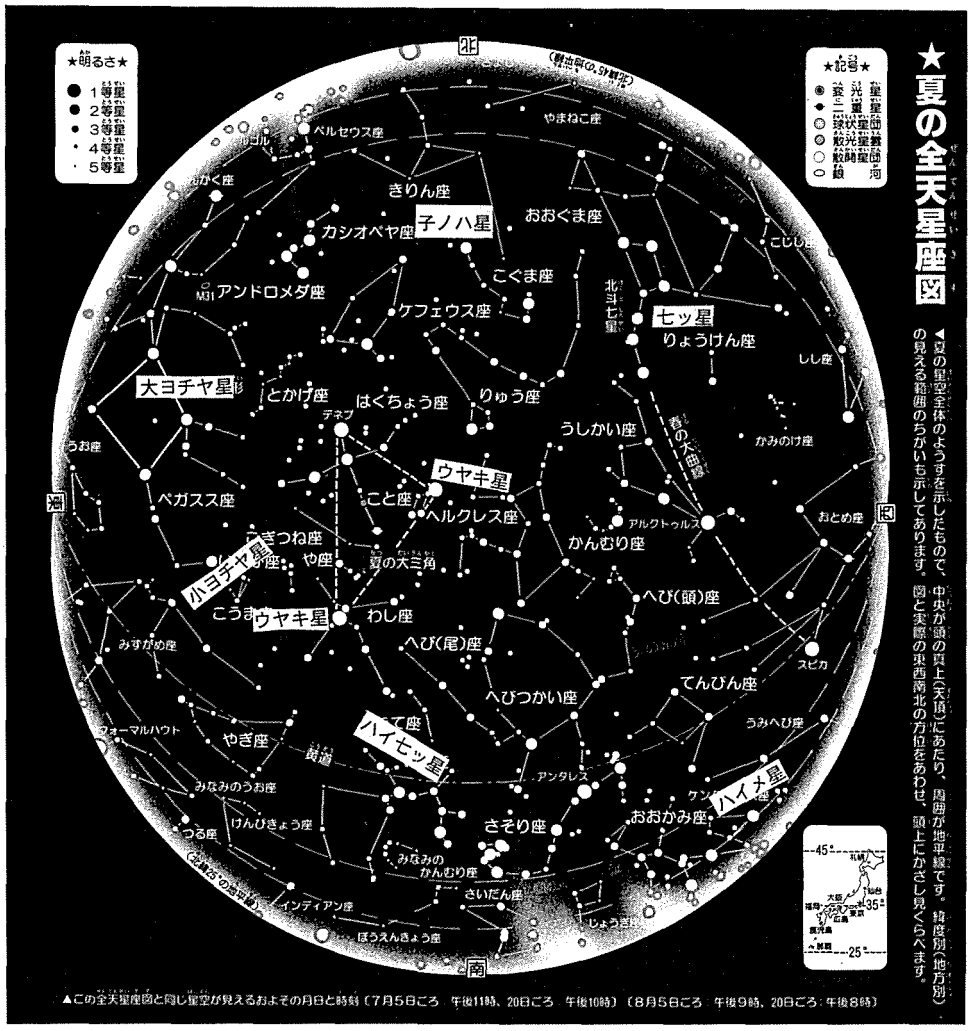
※1．シィカマ星（仕事星＝金星）

※2．宮古「狩俣祖神のニーリ」の歌謡に「天の赤星」・「太陽の子」と謡にあるの「金星」と解釈されている。

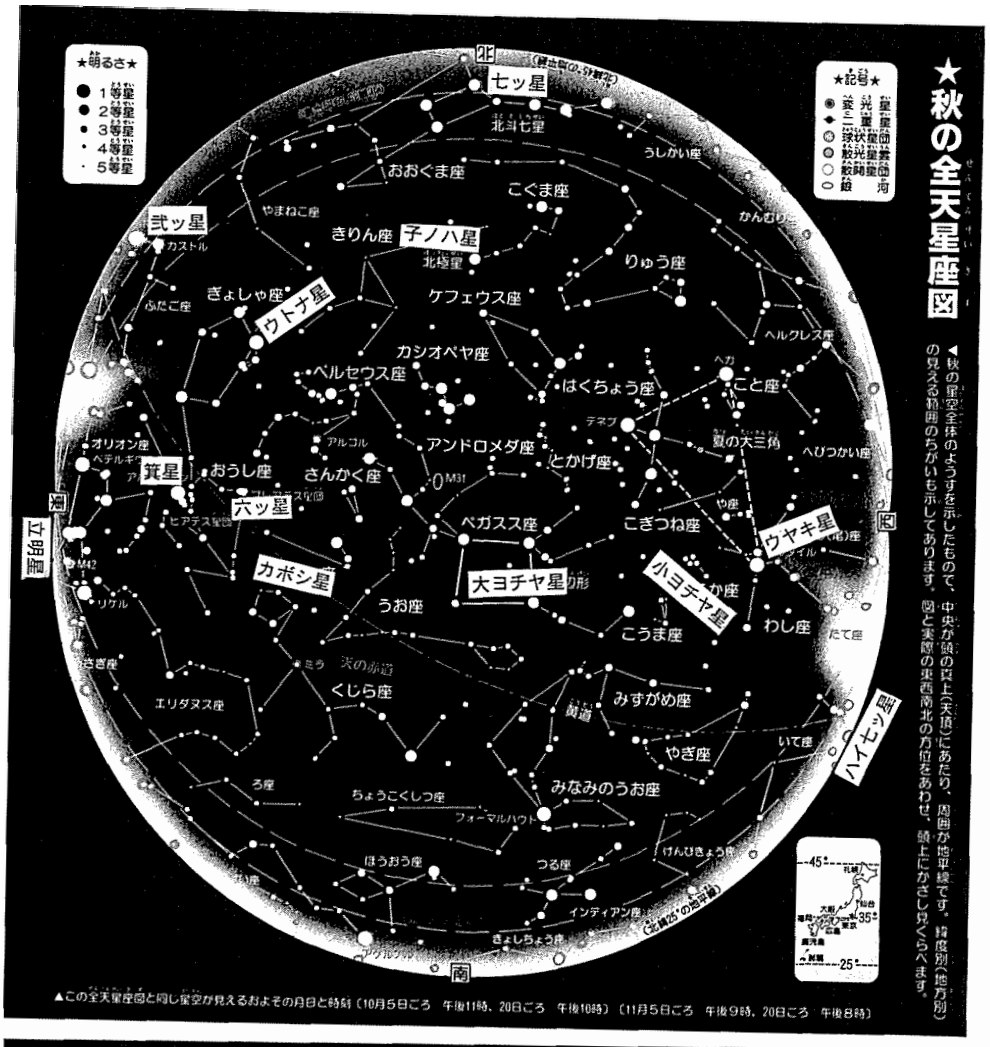
※3．水星と金星は、夕方の西空や明け方の東空に低く見えるが、夜中は見えない。

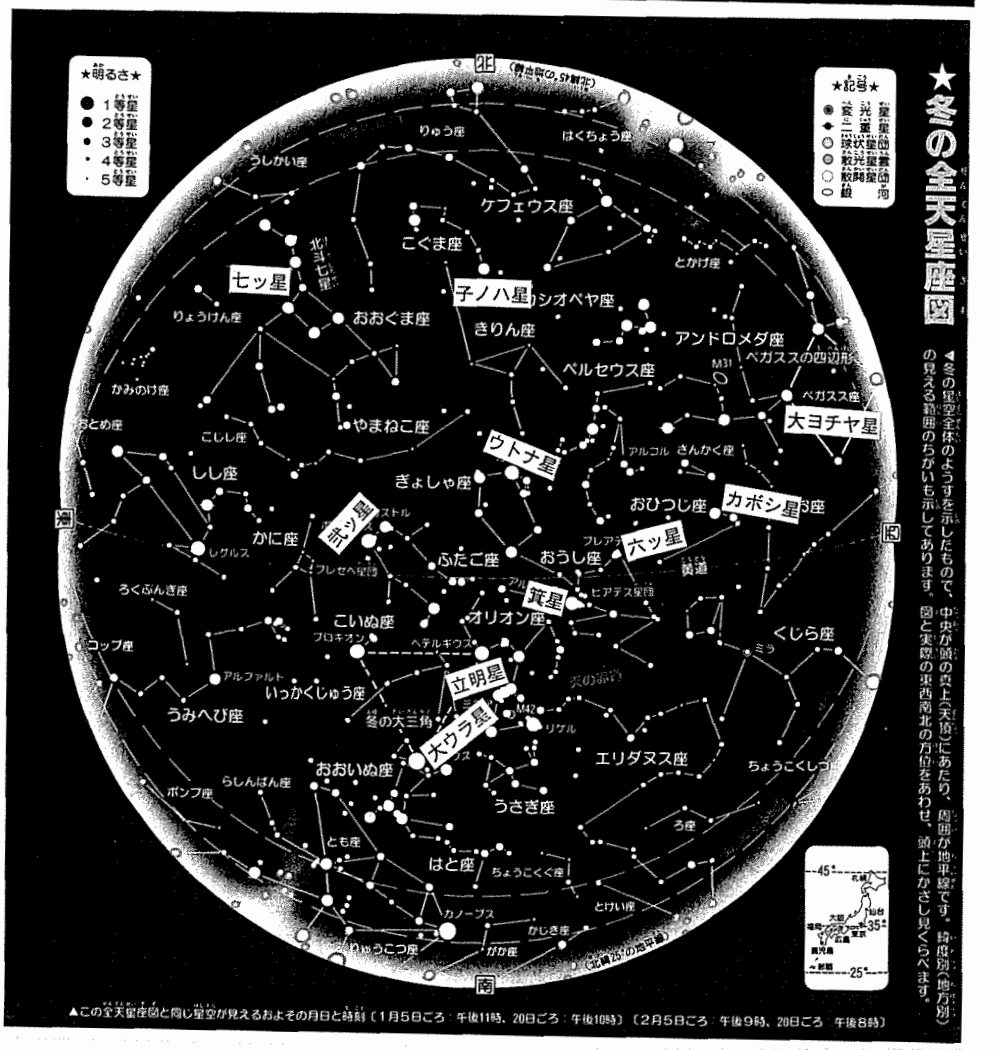
第16図 黒島為一《史料紹介》『星圖』『天気見様之事』『星見様（仮題）』『八重山博物館紀要』第16･17号合併号 石垣市立八重山博物館 1999年より。





第17図　藤井 旭『星がみえる　星座早見図鑑』株式会社 偕成社 1999年10月 10刷より。

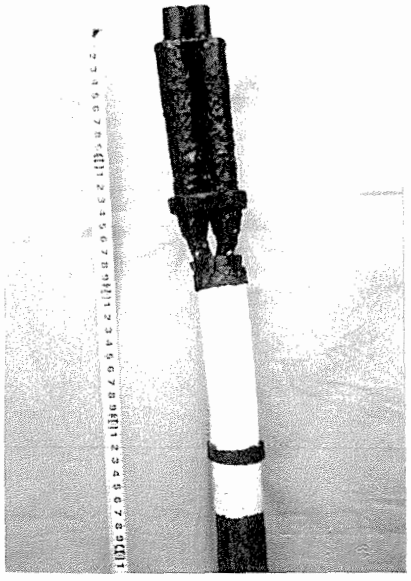




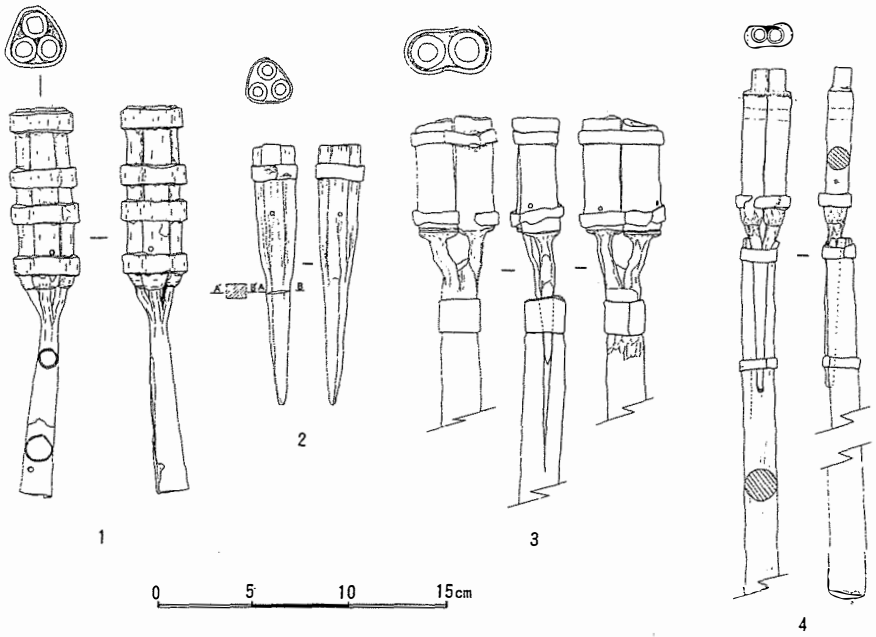
第18図　藤井 旭『星がみえる　星座早見図鑑』株式会社 偕成社 1999年10月 10刷より。

図版10　中国南京城内の石弾

図版7　真栄里西村の火矢
（糸満市字真栄里の屋号「大栄」所蔵）



図版8　石垣市新川の火矢



第３図　1　沖縄県立博物館所蔵の火矢　3　糸満市字真栄里西村の火矢
2　糸満市字真栄里東村の火矢　4　石垣市字新川の火矢

第19図　参考資料：當眞嗣一「火矢について」『南島考古』第14号（学会創立25周年記念特集号）
沖縄考古学会 1994年12月より。